
ひまわりに恋して

柚 雨深

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひまわりに恋して

【Nコード】

N06531

【作者名】

柚 雨深

【あらすじ】

中学1年の桜。幼馴染みの理深は初恋の相手だけど・・・理深は桜のその思いは知らない。ある日偶然に桜の母と理深の父親が、昔恋人だったことを知る。揺れ動く桜の気持ち。理深に思いは伝わるのか。ほのかに淡い初恋のお話。

プロローグ

「桜、早くしないと、遅れるわよー」

「はーい」

天気は快晴だ。

今日から私は、白樺学園中等部の一年生になる。
時間は午前7時30分。

『やば、遅れちゃう……………』

急いで朝食にキッチンに行くと、そこには驚いたことにリジンがいた。

「えっ、」

「おはよう」

爽やかな声と笑顔が返ってくる。

一瞬で目がパッチリ。私の初恋の相手でもあるリジンがいた。

「なんで理深がいるの？」

「一緒に登校してくれるって、待っていてくれたのよ。良かったわね、桜。私も昔に戻りたいわー」

「何、訳のわかんない事言ってるのよママ、朝からおかしいわよ」

「だって、ラブラブで羨ましいわ」

『ちょっと、やめてよー』何言い出すんだかこの母親は。そりゃ、理深には好意を持っているけど、理深は私のそんな気持ち知らないのだし・・・

朝から何やってんだろ。

理深も笑っているし、最悪。

私の気持ちも知らないで・・・

でも、朝から理深の顔を見れて、嬉しいかも・・・

「ごめんね、変な母親で」

「全然変じゃないよ。僕もそうだといいなー」

「えっ・・・・・・・・」

何、今の理深の発言、意味わかんないし。でも、素直に受け取ると私のこと、好きなの？

でも、そんな・・・言われた事ないし、そんな素振りも今まで感じたことないけど・・・

今日から中学なのに、なんで時間のない今、悩まなくてはならないのかしら。

あっ、時間がない。

私は急いで食事を終わらし、鞆を取りに自分の部屋へと向かった。キッチンでは母の美優と理深が何かを話しているが、聞こえない。

「理深おまたせ、行こう」

玄関に向かってリジンも立ち上がると美優から声が掛かった。

「理深君、今日はお母さんが学校に行くのかしら？」

「いえ、父です」

「あつ、そうなの」

母はそう聞くと笑った。今日は入学式で父兄も学校に来る。

私は美優に来なくてもいいと言ったのだが、どうしても母は来ると言って聞かなかった。

でも、今の嬉しそうな母の顔はなに？

「お母さん、おかしな格好で来ないでよ、恥ずかしいから」

「OK」

軽いなー。ちょっと心配。入学式だから、いつものおかしな派手な姿で学校には来ないとは思うけど、やっぱり心配。

「お母さん、本当をお願いね。恥ずかしいのは、私なんだから」

「今日は大丈夫よ。バッチリ決めて行くから」

「今日は？」

今日わって何？ 良くわかんないけど、あんまりしつこく言って

も余計心配だし・・・

「じゃ、行ってきまーす」

「行ってきます」

と、言って理深も笑って頭を下げた。真新しい鞆を持つと、玄関を出る私の後に付いて来た。

「二人とも気を付けてね。手を繋いでラブラブで行くのよー」

「ハアーツツ」

母の発言に顔が赤くなるのが自分でもわかった。

えっ、理深・・・なんで、にこにこ笑っているの。

本当に手を繋いでくれるの？

ここは恥ずかしがるところでしょうが。

私だけ・・・恥ずかしいじゃない。

理深は何も感じてないの？

私の事なんて、眼中にないわけ？

それだと、ちょっとショックだけど・・・

「桜の母さん、おもしろいな」

「昔からでしょ。でも、最近それが加速しているのよね」

「加速？」

「そっ、加速。だんだん酷くなっているって意味」

「なるほど」

そんな事で感心しないでよ・・・

玄関を出て、学校に向かって二人で歩いた。家から学校までは徒歩で20分位の距離で、今の時間だと十分に間にあう。

天気も最高、理深と一緒にだし、今日はなんかとっても気分爽快。

白樺学園に無事入学できたことも気分がいい。

白樺学園はこの辺りではちょっと有名な私立中学。偏差値も高く合格は難しいと言われていた私が、何とか合格した。かなり無理して受験したと自分では思っていたけれど・・・どうしても理深と同じ中学に入学したかった。でも、そんな事は、理深は知らない。

父も母も「公立でいいだろ」と言ったけど、理深が行くと言ったら受験を許してくれた。

おそらく私が合格しないと考えていたと思うが、塾の模試では十分合格判定が出ていた。

恋する乙女の努力が報われたのよ。

これから楽しい中学生生活が始まるのかなー

楽しい中学の初登校。

美優ったら本当に朝から困っちゃう。でも理深は笑っていたけど・
・どんな気持ちだったのかな。・・本当に手なんか繋いできたり
して・・ちよっと恥ずかしいけど、理深なら勇気を出して、繋い
でみようかな。

そんなことを考えていると、校門が遠くに見えてきた。そうだよね、
手なんか繋ぐことなんて今までだって無かったし、小学校の低学年
の頃はあったかも知れないけど、今はね。昔とは意味が違うし・・
ありえないわね。

そんなことを考えていると後ろから肩をたたかれて振り向くと、同じ
小学校出身の友香と雪香の双子がいる。

「おはよう、桜」

声もピツタリ。さすが双子だ。

「西沢君おはよう」

「おはよう。なんだよ気持ち悪いな、西沢なんていつも言わないの
に。」

「だって、入学式から桜とラブラブだったから。」

「羨ましいのか？」

「えっ」

私の気持ちも知らないで、理深そんな事言ったらだめだよー。
新庄姉妹が驚いている。

姉の友香がにこにこしながら桜に聞いてくる。

「桜、いつから付き合っているの。春休みから？」

付き合ってる？・・・ちょっとビックリな友香の発言だけど・・・
少しからかってみようかな？

「ノーコメント」

今度は新庄姉妹ではなく理深が驚いた。

「桜・・・！」

えっ、なんか私まずい事、言ったかな。

なんで、理深が驚いているの？

「へー」

三人して私の顔をジロ見。

無言の理深。

何よ、そんな顔しないでよ。なんか不安になるじゃない。

「桜、後でゆっくり話を聞いわ・・・」

妹の友香が小さな声で話し掛けてくる。

話って言われても特に何もないし・・・

「なんとか言っつてよ、理深」

「ノーコメント」

と言っつてまた笑いだした。

この顔がいいんだよねー。

ねー、本当に付き合っちゃう？・・・でも、それには理深が告白してくれないと・・・

私からなんて・・・絶対、無理だからね。

新庄姉妹は私と理深を置いて先に行ってしまった。

「ねー理深、朝、美優と何話していたの？」

「・・・秘密」

「秘密？・・・何よそれ、言いなさいよ」

「ノーコメント」

「ばか・・・いいよー、帰っつて美優に聞くから」

「それがいいな。話してきたのは桜の母さんだし、俺からは言えないな」

「なに、そんなに重要にことなの？」

「人による」

「人による？」

「そっ、人による」

「意味わかんないし・・・」

良くわかんないけど、理深が笑っているから・・・
まっ、帰って美優に聞けばいいことだし・・・

そうして話をしながら理深と校門に入った。

楽しくなるのかな、中学・・・ちょっと心配・・・

01. 初恋第一関門

生徒玄関から校舎に入るとみんなが大騒ぎで、壁に張り出されている自分のクラスを確認している。

そりゃー、みんな気になるわよねー。私も心配だし・・・

白樺学園の新生は210名で、35人学級の6クラス。

クラス割りの表示された廊下には、新生が自分のクラスを確認するために群がっている。

キヤーとかワーとか騒ぎながら、みんな必死に自分の名前を探して、中には何人かの父兄も新生と一緒に名前を探している。

早いなー、もう父兄も来ているんだ・・・お母さんホントに変な格好で来ないでね・・・
たのむよ・・・

そんなことより、私はどのクラスなのだろうか。

確率は1／6・・・理深^{リジン}と同じクラスになれます様に・・・

あっ、ひとクラスは女子だけの家政科専攻のクラスなので、確率は1／5だね

白樺学園は中高一貫教育のため、中等部でも高校と同じように家政専攻課を設けている。

公立の学校ではおそらく少ないであろう。いや、存在しないであろう家政科専門のカリキュラムがここ白樺学園の中等部には存在する。以前は女子校だった名残で家政科だけはお嬢様学校の雰囲気が残っている。

そのカリキュラムとは・・・何のことはない、花嫁修業に特化した科目だった。体育は家政科だけに、薙刀の授業がある。昔からの科目がここには残っている。同じ学校でも私達の普通科の授業には薙刀はない。私もちょっと興味があつたのに残念だ。白い鉢巻きと黒い袴はかなりオシャレに思う。この薙刀の授業のために、この学園に入学してくる生徒もいるらしいが、高等部はクラブもあるが中等部はない。授業で薙刀があるのが家政科だけの理由らしいが、良くわからない。高等部の薙刀部は全国レベルの強豪で入部希望者も多いみたいだが、希望者が全員入部できる訳ではなかった。

中等部は全員どこかのクラブに入部しなくてはならないことになっている。私も早く決めなくてはいけない・・・

どこのクラブにするか考えても、わからなかった。自分の希望したサッカー部の女子部が白樺学園にはなかったのだ。目指すは、なしこジャパン。

でも、リジンの進むと決めたこの学校に進学したかった・・・

私とリジンを追いついて先に学校に着いていた新庄姉妹がこっちに寄ってくる。

「リジン、私と同じB組だよ」

妹の雪香が理深に近寄り、話し掛ける。

ちょっと・・・あんまり・・・接近しないでよ・・・

「ふーん、そうか、B組か」

さもどうでもいいような感じで、リジンは上履きに履き替えている。

えー、私は、私は・・・どうなのよ。早く、おしえて・・・

なんで、私には、教えてくれないのー

「友香、ね、私は？」

「桜・・・なにになに？ そんなにリジンと一緒にかどうか知りたいわけ？」

「もー、友香のいじわる・・・」

友香が意地悪をして焦らしているのがはっきり分かる。全て冗談でやっているのか、それとも多少本気で意地悪をしているのかは良くわからないが、笑っているので私をからかっているのだろう。

この新庄姉妹には、いろいろと適わない。

向こうはペアだし、こっちは一人。

それもあるけど、

特に、恋愛問題に関しては友香と雪香の最強タッグには私は勝てそうにはない。

2対1ということもあるが、何より彼女らは私より恋愛に関しては経験者で先輩だ。

双子同時に、それも双子相手に付き合っているのを知っている。そう言えば、新庄姉妹と付き合っていた石田兄弟の双子は、白樺学園ではなく隣街のライバル校の私立清陵中学に行ったのだった。同じ中学ではないけど、どうするのだろうか。これからも、新庄姉妹と石田兄弟のW交際は続くのだろうか。自分のことよりも気になる。

似ている二人だから、やっぱり似ている二人を好きになったのだろうか。二人一緒に交際を申し込まれたのであろうか。どうやって交際が始まったのであろう。前から新庄姉妹に聞いてみたいのだが、なんか勇気がなくて聞けない。

恋愛の先輩だし、・・・

理深^{リジン}のことも相談してみようかなー

それと一緒に双子の恋愛についても・・・聞いてみたいが・・・

そんな新庄姉妹のちょっとしたイジワルはいつもの事だ。いつも悪気はなく、冗談半分でみんなをからかっている。

でも、早く知りたい・・・

私は急いでクラス割りを見に走ると、

「桜、残念。リジンとは別のクラスだよーん」

「えっ、ウソ？ ホント？」

「うそだよーん」

「んもー、雪香のいじわる」

結局、同じ小学校出身の新庄姉妹、私とリジンは同じ1年B組となった。

第一関門突破。

同じ学校から入学した生徒も私達の他に何人かいたが、私と昔から仲の良かった4人が一緒になればそれで良かった。なにより、リジンと一緒にのクラスになれた事にホッとした。

そつ、これからリジンと恋の花を咲かせるのだ・・・

1－Bの教室に入ると知らない顔ばかりだった。いろんな学校から集まっているから仕方ないが、この仲間達とこれから一緒に過ごすかと思うと、これからの生活に不安もあるが期待も湧いてきた。

私達4人は何となく、教室の後ろの方で座った。席には何も表示はされてなく、自由なのであろう。空いている席に自然に座った。

小学校とは違うのだ、あたりまえか。席は自由なんだね。

前の入口から担任が入って来た。

「それではみんな席に着け。座席は自由だ」

ガタガタとまだ席に着いていなかった人達も席についた。

「席に着いたか。・・・当分はこの席で授業をするので、そのつもりで」

ザワザワ・・・

ふー。良かった

私達4人は窓側の一番後ろの席に纏まった。

でもかなり簡単な決め方じゃない？

こんなん、いいの？

一番後ろの窓側にリジン。その隣が友香、友香の前が雪香でリジンの前が私だった。

・・・どうしてリジンの隣に座らなかったのか、ちょっと後悔・・・

でも、後ろはすぐリジンだし、隣の席より近いから、こっちで良かったかも・・・

「それではこれから入学式が始まるので、廊下に並べ。男女一列ずつだ」

廊下に並んで体育館に進む。

体育館には新生生の座るイスは既に並べられていた。入学式には二年生は出席しておらず、並べられているのは、二年生のイスだった。体育館には在校生の三年生と父兄が既に来ており、私たちは吹奏楽部の演奏で入場した。

入口を入れて正面がステージ。右側に来賓、左側と後方に先生方と父兄が座っている。

・・・母親の美優は・・・見えない

・・・約一時間の入学式が無事終わり、新入生が一同にステージに集まり記念写真を撮って入学式は全て終わった。

中学でも記念写真撮るんだ・・・小学校と同じなんだ。高校でも撮るのかな・・・

写真を撮る時になって、初めて母の美優を見つけた。体育館の後ろでステージを見ている筈が・・・

私を見ていない。

隣の父兄と話しをしている。

・・・リジンのお父さん？

なんか・・・仲よさそう・・・

洋服は合格。というより、かなり良いんじゃない。あんな洋服持っていたのか不思議。私は初めてみる母のスーツに合格点を出した。

でも、こっちは全然見ないで話に夢中みたい。

ちょっとは娘をみなさいよ。

でも、リジンのお父さんと、そんなに仲良かったの？

確かに母親同士は知り合いというか、同級生とは聞いているが・・・それで、私もリジンと幼い頃から良く遊んでもいた。

家が近所だったこともあるが、母親同士が同級生だったことが大きく影響していたことは私にも理解できた。

でも、リジンのお父さんとは面識も無かったし、私も良くは知らなかった。

「では、新人生は教室に戻ってください。父兄の方はここでオリエンテーションを行いますので、空いている席にお着きください」

先生がそう言って私達はゾロゾロと教室に向かった。体育館を出る時に母と目が合った。

美優は笑って、小さく手を振っている。

子供じゃないんだから、手なんか振らなくてもいいから。

40代半ばの美優は他の母親に比べて少し年齢が高いと思ったが、我が母ながら他の若い母親に比べても十分に美しかった。

今日のライトグレーのスーツは良く似合っている。・・・良かった。

隣のリジンのお父さんも・・・ステキ。リジンは父親似なんだねー。

でもあの二人、並んでいるとまるで夫婦に見えてしまう。

あの二人が夫婦だったら、私とリジンは兄妹？・・・ダメダメ、そ

れは絶対・・・

何、馬鹿なこと考えているの、私・・・変よ、桜。

でも、我が母ながら違和感なく似合っている二人・・・

なんか、嫌な感じ・・・正直あまりあんな美優の姿見たくない。父以外の男性と・・・

教室に戻ると、朝教室に来た先生が教壇に立っていた。おそらく担任だと思う。

・・・なんか怖そうな感じ

「今日はこれで終わる。来週月曜から授業始めるので、事前にプリントで指示された必要な物を忘れない様に。月曜は終日オリエンテーションなので教科書は持って来なくていい。了解か」

「はい」とみんなが返事をした。

「じゃ、今日はこれで終わる。帰っていいぞ。父兄のオリエンテーションはもう少し時間がかかるので、待っているのだったら教室で待っていてもいいぞ」

そう言って、先生は教室から出て行った。

えっ、先生の名前・・・聞いてない・・・

自己紹介もしないで、いなくなる先生。

これでいいのかなー

「ねえ、リジン。先生名前も言わずに行っちゃったけど」

「だよな」

「こんなん、いいの」

「わかんねえよ」

リジンはそう言って立ち上がり、私と新庄姉妹に向かって、

「じゃあ、帰るか」

と言って席を立ち、空の鞆を持つ。

「鞆、今日必要無かったな。持って来なくていいなら、そう言え
ばいいのにな」

「だよなー、なんか必要あるかと思って私も、持って来ただけ……
」

私がそう言うのと新庄姉妹は、

「私達持って来なかったよ、必要無いと思ったし、授業ないし」

「確かにそうだな……」

リジンが頷いている。

「ま、友香も雪香も勉強嫌いだしね」私がそう云うと、

「もー桜ひどいなー。確かにそうだけどね。でも青春には勉強よりも大切なものがあるの。ね、リジン」

と言って友香がリジンを見る。

えっ、友香、その目・・・怪しい・・・ウソでしょ。やだー・・・ライバル？

「ハア、俺に振るな。俺は勉強が大事だ！」

「はいはい、優等生のリジンはそうでしょうよ」

「でも、勉強嫌いのおまえら、良くここに入れたな」

「ヒドイ、リジン。私達は花嫁修業に来たのよ」

「じゃなんで、家政科に行かなかったんだ？」

確かにそうだ。花嫁修業は家政科のはず・・・

「リジン、家政科って女子ばっかだよ。そんなの全然楽しくないじゃない」

「ハア、なんかおまえらの言ってること、どっか間違ってるぞ」

「要はここに入学したかったの。母もこの卒業生だし。でも、ちよっと合格するか心配だったけど・・・ね、雪香」

「俺もホントそう思うよ。あんだけ勉強しないで遊んでいたおまえ等、それに桜も合格するなんて不思議でたまよねー」

「ちょっとリジン、それはあんまりじゃありませんか。私だって受験勉強したんだから」

「受験勉強と言っても、俺が家庭教師してやったからだろ」

「えっ、桜、リジンに家庭教師してもらったの？」

うっ、やば。新庄姉妹にバレタ・・・

「う・・・ん。うちの美優がリジンと一緒に勉強してたのんだの。家が近いから・・・」

そう言うとな新庄姉妹は顔を見合わせ、

「これは本物ね」

「そうね・・・」

と、笑っている。

「何が本物なのよ」

ちょっと私もムキになって聞くと、

「桜、とぼけるの、やめたら・・・」

「何を・・・惚けているって?」

「ま、いいわ。後でじっくり尋問よ!」

「尋問?」

「そっ、今日は桜のおごりで、マックでじっくり」

「うっそー・・・ま、いいか」

私達4人は親を待たず先に帰ることにした。

美優は今頃オリエンテーションかな? まだ、リジンのお父さんと一緒なのかなー

まっ、でも今日はリジンと同じクラスになれたし、バンバンザイかな・・・

02. 恋のスパイラル

結局、私は3人に奢られ4人分の代金を払う羽目に。

トホホ、どうしてこうなるの。リジンの分は家庭教師でお世話になったからいいけど、

「で、桜、さっきの話は？」

私は惚けるように友香に向かって、

「なんの話？」

「あんたね、完全にすつとぼける、つもりね」

みんなが、ハンバーガーとコーラを飲みだしたら、友香が聞いてきた。

リジンもいるのに、ここで私の初恋話をホントに・・・するの？
いいけど・・・

「家庭教師の話、どうなのよ」

「勉強一緒に、しただけだよ」

「それで・・・」

「それでって、何？」

「それで、付き合っているの？」

友香がしつこい。リジンは関係ないような顔してコーラ飲んでるし・
・雪香もこっちを見て私の返事を待っている。

もー。なんとかして・・なんて、返事すればいいの・・・

・・・そりゃ、付き合っているって言いたいけど、そんな事実はないし、まして隣にはリジンもいる。いなかったら、言っていたかも知れないけど・・・

なんとか言いなさいよ、リジン・・・

私、きつと逃げられないよ。

でも、ここでリジンの気持ちを聞くのも、ちょっと勇気がいるかな。

さっきの友香の反応が気になるな。友香は付き合っている人がいるのに、リジンのこと好きなの？・・・

「女の口からなんて、言えないわ」

言ってしまった・・・

リジンが咽せて、私をジロ見した。やばかったかしら今の発言。

リジンは驚いた様子だったけど、という事は・・・私に希望はないの？

「お前なー、ちょっとは考えて、発言しろ」

「ごめん」

ペロツと舌をだしてリジンに謝ると、また何もなかったようにリジンはコーラを飲み出した。完全にシランプリ。相手にしていない。

「リジンはどうなの？」

雪香の、いいつつこみ。

私も早くその答えが聞きたい・・・

女子に人気のあるリジンだか、今までリジンの恋愛話は聞いたことがない。リジンを好きな女子がいたのを私も知っているが、付き合ったなんて噂も聞いたことがない。

リジンの近くにいつもいた私は、そんな女子から睨まれたこともあったくらい。背も高いし、成績だっていつもトップ。もてない筈はないから。

どうして、そんな話がなかったのか、実は私が一番知りたい。不思議、絶対もてるのに。リジンから告白したらおそらく、断る女子はいないと思う。

楽しみ、リジンの答え・・・でも、心配・・・

「・・・・・・・・」

リジンは答えないで、またコーラを飲み出した。2個目のハンバーガーも。

「リジンも桜のこと、好きなの？」

リジンもって言ったら、私がリジンの事好きだってことじゃないのよ・・・

そうだけど、・・・いいつつこみ、友香。ありがとう。

実は私のこと、応援してくれているの？

「友香、リジンもって・・・そしたら私はリジンのこと、好きだってことじゃない・・・」

友香も雪香も私の気持ちを分かっている筈だからいいけど、リジンの反応は・・・

「ちがうの？」

そんなのここで、返事できる訳ないでしょ。

「・・・・・・・・」

リジンがコーラを飲み終わった。さて、どんな・・・答え・・・

「私、リジンのこと、好きだよ」

えっ、雪香突然何を言い出すの。

びっくり、私の気持ち知っていて・・・それでも言うの、強敵ね。

・・・雪香も双子の石田兄弟の兄と付き合っている筈なのに・・・ライバル3人？・・・いや、まだまだいる。

これからどんな展開になるの・・・

「雪香・・・あんた・・・」

「お姉ちゃんも好きでしょ？」

えっ、完全に新庄姉妹にやられた。私はどうなるの、リジンなんとか言ってよ。

「双子だから、お姉ちゃんの気持ち良くわかるよ。・・・だから、お姉ちゃんも私の気持ち、良くわかるよね」

へー、双子って、そうなんだ。知らなかった。さすが恋愛最強新庄姉妹。

「ね、双子って、同じ人を好きになるの？」

私の疑問をぶつける。このまま、聞きたかったこと聞いてしまいたい。

反撃よ！

新庄姉妹は一卵性のためか、本当に良く似ている。ヘアースタイルも声も顔も、もちろん体型も背の高さまで同じ。ただ、姉の友香は一重で雪香は二重。私はこの違いで見分けているが、遠くだと全く区別できない。おそらく双子の石田兄弟だって、友香の替わりに雪香がデートに来てても、分からないと思う。

それくらい、本当に似ている。

クラスが同じだから、きっとみんな最初は間違っただろうな。

反撃開始。新庄姉妹に質問して、話を少し脱線させなくては……

「ね、どうなの？ 同じ人を好きになるの？」

「リジンはそうだね」

二人同時のユニゾンの答え、驚き。リジンも目を丸くしている。でも、困ってはいない。

嬉しいの？・・・そりゃーそうよね、こんなにカワイイ双子の姉妹に同時に好きと言われて、嫌な気持ちになる男子がいたら、会って見たいわ。

「リジン、嬉しいの？」

ちょっと、この追求はやバイかな？

「桜、カワイイ双子の新庄姉妹に、同時に好きだと言われて嬉しくない男子がいるか」

ショック、確かに間違っていない。リジンは正しい。私も男子だったら、絶対に嬉しいと思う。私より、全然美人だし、スタイルもいいし、胸だって・・・なんで、こんなカワイイ姉妹が私の近くにいるの・・・絶対に不公平だ。

「リジン、じゃ、私と付き合って」

またしても二人同じのユニゾン。

ウソ・・・なんで、二人して・・・

えっ、でも・・・ちょっと、待ってよ・・・

「えっ、ちょっと、なによ、あんた達。付き合っている人、いるでしょ？」

「別れたから、いいの。ね、友香」

なんか、すごく積極的な雪香の発言。主導権は完全に妹の雪香だ。

その後の話で、双子の石田兄弟とは二人とも別れたと告白した。

学校が違うし、いつも会って居ないと嫌だと言って最初に別れたのは雪香で、雪香が別れるのであればと友香も一緒に熱が冷めて別れたと。双子はハートも一緒か？

・・・そんな、もんかなー・・・不思議

「ね、リジン、返事は？」

「・・・ごめん。・・・むり」

「どうして？好きな人いるの。・・・やっぱり、桜？」

雪香の追求、新庄姉妹は真剣。リジンをジロ見で返事を待っている。

でも雪香、ナイス、つつこみ。サンキュー。

私は告白された事ないから分らないけど、一度にそれも双子から同時に告白されたら、きつと誰でも悩むと思う。例えそれがカワイくて、みんなが付き合いたいと思っている新庄姉妹でも。

で、なんで、そこに私が・・・私も知りたい。

どうする、リジン・・・

「雪香も友香もカワイイし、俺は好きだよ。でも、付き合えないな」

「だから、どうして」

友香も力が入っている。

「・・・あのな、さっも言ったけど、雪香も友香もカワイイよ。本当に二人とも良く似ていて、どっちって決められないさ。きつと付き合えばすぐに区別できると思うけど、今の俺には二人を見分けることは無理だな。付き合えば10メートル離れても、どっちか分かれると思うけど今は絶対無理。という事は、友香と付き合ったら雪香を好きになるだろうし、雪香と付き合ったら友香も好きになると思うんだ。付き合ったら、だんだん、好きになるだろうからな。そしたらきつと、二人とも好きになってしまうわ。まさか、両手に花で登校するわけにいかねーだろ。うれしいけど、お前等のどっちかと付き合ったら、二人を好きにならない自信なんて、俺にはないな。それくらい、お前等、カワイイよ。そう思わないか、桜」

えっ、えっ、なんで、私に振るの・・・返事できる訳ないでしょーでも結構リジン、新庄姉妹を褒めていたねー、もしかして、褒め殺し・・・

さて、新庄姉妹の反応は？

まさか、二人一緒に付き合うなんて事は言わないわよね・・・

で、なんで最後に私に同意を求めるわけ。それに雪香は私のことも聞いたんだよ。それが答えなの。私のことが好きなの？

「えっ、えー、私に言われても・・・困る」

「二人一緒に付き合おうよ」

またしても二人同時のユニゾン。それも問題発言、さすが恋愛最強新庄姉妹。

03. 恋の四角関係

「二人一緒に付き合う？」

驚くも、にやにやするリジン。

「何考えているのリジン。そんな事ダメに決まっているでしょ」

思わず大声になってしまった私。

そんな事になったら大変。

なんとしても阻止しなくては。

「どうして・・・」

友香が突っ込む。

どうして？・・・ダメに決まっているでしょ。・・・なんと言うか・・・その・・・

それとも何、本気で3人で付き合うつもりなの・・・

「どうしてダメなんだ、桜」

リジンまで・・・本気なの？

「リジン、本気なの？」

さっき付き合えないと言ったでしょ自分で・・・

「参考のために、桜の3人で付き合ったらダメな理由を、聞いておきたいだけだ」

「桜、どうしてダメなのか私にも教えて」

雪香まで私を責める。そんなに言われたら困ってしまうけど・・・
当然のことではないの・・・3人で付き合ってもいいの？

「・・・」

「桜は自分も入りたいんでしょ？」

「え」

もう友香も何を言っているんだか・・・
自分でも、何が何だか分からなくなってきた。

4人で付き合う？　なんでこんな展開になるの・・・

でも、友香と雪香が気持ちをリジンに告白した以上、私も引き下が
れない気持ちもある。

二人が告白したから、自分も告白しても恥ずかしさは少し・・・薄
くなるかも。でも・・・

「4人で付き合うのは、どうかなー」

双子の意見が初めて割れた。そうだよ、あんた真ともだよ、雪香。

「どうしてお姉ちゃん？」

「友香とは双子だから気持ちは同じになると思うけど、桜は違う。
それにきつと、桜はリジンと付き合いだしたら、独占したくなるね。
きつと」

そんな理由なの、みそこなったよ雪香。

「そうかなー」

「そうだよ、きつと」

さすが恋愛最強姉妹、何を考えているのか、わからん・・・でも、ちよつと、はずれてないか・・・

入学初日から、なんでこんな大変な話になるんだろ。でもここではつきりしておかないと、私の中学校生活はバラ色ではなく灰色になってしまつて、学校にも登校したくない気持ちになったり、最悪の人生になりそう・・・そして最後は非行に・・・ダメ・ダメ・・・

私は、意を決した。

「別に中学生だし、結婚する訳でもないから、仲良く3人でも4人でも一緒に付き合つて悪くはないかも知れない。でもね、好きになつたらいろんな相談をしたり、話をしたくなると思うの。そんな時、この人は私だけが好きだと思つたらなんでも相談できると思うんだ。それはきつと特別だから。その特別が私の他に2人もいたら、特別にならないんじゃないかな。そしたら相談もできないよ、きつと。だいたい、付き合うつてどんなものかも、良くわからないし。そりゃ、少女マンガで読んだりして、なんとなくは理解できるけど、私にも憧れはあるけど、難しいかな」

「へー、」

新庄姉妹の同意とも否定ともとれる反応。リジンはどうなのよ・・・

「きっと桜の言っている事は正しいと思う」

さつきは3人で付き合う事に同意した雪香が同意する。友香よりはやはり姉の所為か、正常になりつつあるのかな。

たかが中学生の恋愛かも知れないけど、私にとっては重大事だ。自分の気持ちに今嘘をついて、これからずっと後悔はしたくない。

これでリジンとの恋が実らなくても、ずっとリジンを追っかけるぞ
1。

席は後ろだし、まだ、チャンスはある。そう自分に言い聞かせた。

これがさつきの3人で付き合ったらダメかの答えになっているかどうかわからないが、私にはこれ以上の答えはムリ。

「桜は俺のこと好きか？」

「え、え、ー」

女子3人同時の反応。新庄姉妹は目を丸くしてビックリ。私はそれ以上の反応で、思わず口に入れたコーラを正面のリジンに吹き出しそうになり、必死で口を閉じて我慢した。あんまり力を入れて我慢したので、おそらく顔は真っ赤だと思う。コーラの炭酸がのどにつかえて声は出せない。声が出せても、今の質問には答えられないと思うから、返ってよかった。どうしていいかわからなくて、さつき新庄姉妹がリジンに告白したので、リジンの目を見て、首を縦に動かした。

勿論、新庄姉妹もビックリしている。それは私の返事より、リジン

の質問に対してだと思うが・・・

私が首を縦に動かすのを見たリジンは・・・

私の手にある飲みかけのコーラを私から奪うと・・・

飲み出した。

うそ、・・・間接・・・キッス・・・

目を大きく開けて、さらに驚く私。・・・うっそ、飲んだの・・・
でも、嬉しい。

でも、これって・・・どういことなのか、良く理解できないけど・・・

もしかして・・・バラ色の中学生活？
コーラを飲み始めたリジンは、

「新庄シスターズ、そういうことだから」

と言った。そういうことって・・・どういこと？

「やっぱりね」

友香がそう言った。でもそんなに落ち込んでいる様子はない。
でも、落ち込んでいないということは、どういこと？

状況がまだよく把握できていない私はいろいろ考えたが・・・

バラ色で・・・いいのかな？

04. 予期せぬ展開

今日からの登校はリジンと一緒に。

間接キッスで愛の告白なんて、ちょっとカッコいいでしょ。

リジンと付き合うのを知っているのは、昨日の今日なので新庄姉妹だけ。

母の美優にも言っていない。

毎朝リジンが私の家に来る筈なのでそのうちバレテしまうと思うけど、私の口からは親でも恥ずかしくて言えない。

もうすぐリジンが来るので、早く朝食を食べなくては・・・

「早っ、リジンもう来てたの？」

「もう来てたのではないだろう。リジン君に失礼だぞ。お前が起きるのが遅いんだ」

珍しく父の康太郎が、珈琲を飲みながら新聞を読んでいる。

「珍しいね、朝パパがいるなんて」

「今日はやすみだ」

久しぶりに親子三人が揃った朝食。そして、リジンもいる。リジンはカフェオレを飲んでいるようだ。こうしていると家族みたい。
・・・将来リジンともし結婚したら、こんな毎日が続くのだろうか・

同居？・・・いや絶対に別居がいい。・・・美優が心配だから。

「桃、早く食べなさい」

美優もラフな格好で台所に立っている。

昨日は変な格好でなくて、本当に助かった。いつもはおばさん丸出しの目立つ姿で出歩くので私のほうが恥ずかしくなっているが、さすがに昨日はそうでは無かった。普段本人はいいと思っているのだろうけど、派手。兎に角派手で困る。娘の私より若い振りするの・・・周りではどう思っているのだろうか。やっぱ、派手派手の大阪のおばちゃんの雰囲気だね。なんて。着てる洋服はエスニツク系が多いんだけど、どうなんだろう・・・

「桃、今日も仲良くお手々繋いで学校に行くのよ」

「美優、幼稚園児でないんだから、そんなことできません」

「桃、母親のことを美優ミユと呼ぶのはどうかと思うけど」

「はいはい、了解いたしました。康太朗様」

「まったく、この子ったら・・・ごめんなさいね、リジン。不束な娘ですけど、よろしくお願いします」

「おかあさん、そんな言い方やめて。結婚する訳でもあるまいし」

「えっ、桜はリジンと結婚するんだよ」

「えーっっっ」

冗談にも程がある。今朝も昨日に続いて朝は大変。
私はそうなくても、いいけど・・・リジンがなんて言うか・・・

「美優、桜に何も話してないのか？」

「何も話して無いって・・・なんかあるの、パパ」

嬉しいような、不安なような・・・

「康太郎、桜にはまだ話してないのよ。・・・桜、今夜ゆっくり話すわね」

何があるのかよく分からないが、少なくとも私には悪い話ではなさそう。だって、お手々繋いで学校に行きなさいと言うんだから・・・嬉しいかも？

でもこの話、リジンの顔を見ると知っていそう・・・もしかして、昨日の話・・・

「良かったら、リジン君も今夜一緒に夕食でもどうかかな？」

「はい。大丈夫だと思います。」

「そうか、じゃ私からも由美さんに連絡しておくから。それと例の話、考えておいてくれないかな」

「はい。わかりました」

ちょっと、私には全く分からないのですけど。いったい、どうなってるの・・・

でも、リジンと一緒にいれる時間が増えることは、私にとって最高のよろこび・・・

リジンと二人鞆を持って玄関へ。

美優が玄関まで送る。

そして、余計な嬉しい一言。

「お手々繋いでね」

「うるさい、しつこい」

リジンと二人学校へ向かって歩く。途中できつと、新庄姉妹に昨日の様に会うはずだ。

リジンが手を差し出す・・・うそ・・・でしょ？・・・

とまどってしまう私・・・いくら付き合おうと言っても、すぐに手を繋いで登校するのは・・・かなり目立つし、何言われるかわからないし。

確かに手を繋いで登校する人もいなくはないけど、一年生ではないな

い。

下校ならまだしも、登校はちょっと・・・

「いやか？」

リジンが聞いてくる。嫌なはずないけど、恥ずかしいよ・・・でも、リジンがこんな行動に出るなんて、考えられない。

「おかあさんも、いいと言っているし」

「おかあ・・・さん？ リジン・・・」

どういふこと・・・もしかして・・・

05. 不思議な理深

恋する気持ちは本当に不思議。

リジンから差し出された手に、自分の手を繋いで歩いていた。恥ずかしくて、絶対にムリと美優に言われた時もあったのに、・・・やっぱり私の好きな人にされたら断れるはずもない。

恥ずかしさはある。でも人に見られるその恥ずかしさが、私の心の中で喜びに変化している。

恥ずかしいけど、とっても嬉しい。

リジンと手を繋いで登校できるなんて、最高に幸せ。

そんな幸せな私の知らないところで、特に女子がざわついて大騒ぎになっていた。

こんな噂話は、本人には直ぐには伝わらないものだ。

・・・1Bの西沢と高山が、1年なのに登校二日目から手を繋いで登校した。学校が始まったばかりで、もう付き合いだしたのか。女子も男子も、同級生も上級生も・・・

この噂話は直ぐにリジンと桜にも知れた。
来た来た、早速、恋愛最強新庄姉妹が。

「あんたたち、ちょっとやり過ぎ。みんなすごい噂してるよ」

「やっぱり」

「やっぱりって、桜、大変だよこれから」

「なにが？」

「なにがって、桜は普通だけど、リジンはイケメンだから目立つからね」

「リジンのファンも多いみたいだし」

「ファン？」

「桜、本当に天然ね。全然わかってない」

そう言って、隣の席の新庄姉妹に注意された。

入学式からリジンは目立っていたし、入学する前からのリジンのファンもいるみたい。

あんまりカッコイイので、上級生の女子も狙っていると雪香に言われた。

そうね、昨日の新庄姉妹の様にリジンは狙われているのだ。

でも、男女交際は自由なはずだし、手を繋いで登校している生徒も私達の他にもいた。

さすがに、1年はいなかったが。

「あんまり、見せびらかしたらダメだよ」

と新庄姉妹に忠告された。

・・・明日からは、どうしようかな・・・

リジンは全く関係ないような顔してるし、ホント男子ってこんな時、鈍感なんだから・・・

その日は結局1日ざわついていたが、私に何かを言ってくる人は新庄姉妹のほかはいなかった。・・・リジンはどうだったんだろう・・・誰かに、何か言われたのだろうか。

今日は終日オリエンテーションで終わった。

鞆は必要なかったのを忘れていた。リジンも新庄姉妹も鞆は持って来ていたが、やはり学校に来る時鞆を持っていないと、不安だよね・

そしてもう一つ、私って普通？

普通の意味がわかんない・・・

今日はオリエンテーションが終わったら、各クラブの勧誘と見学会がある。

どうしようかな・・・

結局、今日は4人それぞれ自分の希望クラブを見学することで下校も別々にすることになった。見学の後、リジンは一端帰宅したあと我が家に来るということで、自由に行動することになった。

新庄姉妹はわからないが、リジンはおそらく野球部だ。リトルリーグにも入って活躍していたし、中学の先輩からも勧誘は受けていたみたいだし。白樺学園中等部の野球部はそんなに強豪ではないが、高等部は甲子園も目指せる程強い。高校に行って甲子園を目指すのであれば、間違いなく中等部でも野球だ。

・・・私はどうしようか・・・何の取り柄もないし・・・何やりたいかも、思い浮かばない。

リジンが野球部に入るから、野球部のマネージャーでもしようかな。どうしよう・・・帰宅部がいいんだけど、クラブは強制でどこかに所属しなければならぬ。人生の選択のように悩んでしまう。リジンに相談しようか・・・

「桜どこに見学に行くんだ」

天の助け、リジンから声をかけられた。

「どこに行ったらいいか全然わかんないの」

「入りたいクラブないのか？」

「思い浮かばない」

「じゃ、俺と一緒に来るか？」

「野球部？」

そう言うとりジンは静かに、

「野球部には入らない」

「えっ、野球部に入らないの？」

「野球は取りあえずやらない」

どういふこと。どうして野球部ではないの。リジンの人生、私が決められないけど、・・・

絶対野球部だと思っていたのに、驚いた。いったい、どのクラブ？

「まだはっきり決めた訳でないけど、今日見学に行って決めようと思う。だから桜がまだ決めていなかったら、見学だけでも付いてこないか」

「・・・いいけど」

鞆に何も入っていないので、見学が終わった後、直ぐに帰宅できるように軽い鞆を持ってクラブの見学にリジンについて行くことにした。

どこにいくのだろう・・・

リジンは校舎の中を歩いて行く。そっちに行くと文化部だけ・・・運動部でないの

書道部、華道部、演劇部の部室が見える・・・ってまさか、リジンが文化部？

ま、見学だけかも知れないし・・・

「リジン、まさか文化部？　こっちは文化部の部室があるけど・・・」

「文化部だとだめか？」

「野球部でないから、他の運動部だと思っていたし・・・運動部でないの？」

「リジンが運動部でないなんて、考えられない。それに野球部でないことも。野球部の先輩から勧誘受けていたでしょ」

「ここはリトルリーグの先輩もいるから、勧誘は受けていたけど・・・」

「じゃ、どうして・・・野球部でないの」

「なんとなく・・・」

「うそ・・・」

部室がたくさんあり各部室の前には2・3年生がいて入部歓迎・見学歓迎と書かれたプラカードを持って立っている。

いったいどの部の見学・・・絶対入部するわけじゃないだろうけど・・・でも・・・どこ・・・

美術部、そして一番端の音楽室は吹奏楽部がある。結構いろんなクラブがあるので少し驚いた。こんなに沢山あれば絶対迷う。リジンと一緒にクラブと決めたわけではないけど、文化部なら一緒に活動できるし・・・でも野球部でないのがひっかかる。

初めての校舎なので、どこにどのクラブがあるのか私には全然わからない。端の吹奏楽部まで来ると、リジンまた来た方向へ戻る。探している部室が見つからない様だ。

途中まで戻ると渡り廊下を進む。この先は職員室と図書室その先は職員玄関だ。どこなのだろう。図書室まで来ると、

「ここだ」

「えっ、ここって・・・リジンが・・・考えられない・・・」

図書室の隣の図書準備室の入口に、小さな部室の名札があった。

06. 文芸部入部テスト

図書準備室の戸を押して進むと木製の重厚な大きな机が中央にあり、壁際三方が本棚で埋め尽くされている。入口と窓以外の部分も殆ど本箱が並べられている。十分図書準備室の役割は果たしているようだ。机が立派だが椅子は簡素なパイプ椅子が六脚、三脚ずつ向かい合わせて配置されている。

その古い机に3人の男子が座っていた。机が大きいので片側三脚の椅子を置いても、三人の間は十分に間隔がとれて、狭く感じることはないだろう。それにしてもこの人達が文芸部、体格も良くリジンもそうだけど、とっても文芸部なんて感じは受けない。この三人が街と一緒にあるいていたら、絶対に運動部、それも強そうなクラブに見えるに違いない。どうしてこんな体格の良い人達が暢気に文芸部なんかにいるのだろうか。

「おう、やつと来たな」

背の高い先輩が口を開いた。

「こんにちは」

私もリジンに続いて挨拶をした。

「こんにちは」

男子3人が私をジロ見する。

「リジンその女子は？」

私はあわてて自己紹介する。

「1Bの高山桜です」

「高山さんも入部希望ですか」

一人の先輩が聞いてきた。

「私はあの・・・えっと・・・」

リジンが私の代わりに返答してくれる。

「高山は俺について見学に来ただけです」

「そうか」

そう言ってリジンは先輩と何か話を私には聞こえないようにしている。ヒソヒソと二人で話を終わると、三年と思われるリジンと話をしていった人が声をだした。

「リジンはみんな顔見知りだから、自己紹介は省いていいな」

「はい。いいです」

そう言って私に向かって話しだした。

「高山さん、私がこの文芸部の部長の桜木秋灯シュートです。そしてリジンの隣が副部長の音琶オトワで三年。その隣が二年の荒木です。もう一人二年の部員がいるけど今日は欠席している。文芸部はこの四人。西沢

が入れば五人になるけど、入部するよな、リジンは」

「・・・はい。そのつもりで来ました」

「そうか、じゃ五人だな」

えっ、ちょっと待って。文芸部なのに男子ばかりで、女子はいないのかな？

「あの・・・女子は・・・」

文芸部なのに女子が一人もないの・・・ちょっと考えられないけど・・・

「女子は顧問の木野葉杜^{コノハート}先生だけ。別に女子の入部を拒んでいるわけではないけど、・・・ここ何年か女子はいないな。私が入学した時もいなかったから知っているだけで6年か。」

「女子を入部させないようにしていたのですか、というよりここは男子だけのクラブですか」

「・・・んー、どうだろうな。そんなところも絶対には言えないかな」

学校のクラブだから入部希望があれば断れないはずだけど、不思議だ。どうして女子が入部しないのだろうか。それにしても先輩三人ともすごくカッコイイ。絶対女子も先輩目当てに入部したい人もあると思うけど・・・でもそれをどうにかして入部させないように、していたのであろうか。そうでないと、考えられない・・・私だってリジンがいなかったら、絶対この三人に熱を上げてしまうと思う

けど・・・

「先輩、もし私が入部希望したら入部させて貰えるのですか」

「・・・」

「桜、文芸部に入部したいのか？」

入部希望ではないけど、どうしても聞いてみたった。

リジンが私の顔を見ながら聞いてくる。なんかリジンの雰囲気あまりよくない顔。周りの空気に影響されたのか。私が入部したら拙いことでもあるかの如く、上級生3人の顔は冷たい。見学に誘ったのはリジンなのに・・・

「高山さん、今日は見学だからゆっくりして・・・あとはリジンにいろいろ聞いて・・・」

なんか意味深な言い方が気にいらぬ。さも、私に入部して欲しくない言い方みたい。

「高山さん、文芸部の部室は此処だけなんだ、狭いだろ。だから毎年六人以上部員は増やしてはいけません。椅子の数が六脚だからね。部員が増えたら椅子を増やせばいいと思っていますだろうけど、毎年各学年から二名ずつしか入れてないんだ。それもある決まりによって男子だけになってしまったけど。人数も少ないから、部員を選んで入部させているんだ」

そうしていると副部長の音琶さんがインスタントのコーヒーを全員の分を入れてくれた。

図書準備室でコーヒー飲んで・・・部活・・・ちょっと考えられな

いけど・・・

「副部長の音^{ミュージ}琶美友児です。よろしく」

カッコイイ・・・ステキ・・・絶対彼女いる・・・

「リジン、手を繋いで登校したと噂になっている彼女は、この人か」

「はい、そうです」

「ふーん」

えっ、何？ 今のどういうこと？ 私がリジンに相応しくないとも言っているの・・・

今の・・・ふーん、は私を評価した結果だね・・・

「俺は二年の荒木^{ケンシ}剣士よろしく」

そう言ってここにいる全員がこれで私に自己紹介した。冷たい空気とは裏腹に、三人とも礼儀正しく話し掛けてくれる。最初感じた拒否されたような空気は有ることはあるが、それは三人がそれぞれに持っている個性が纏まるとそう感じさせるのかも知れない。

「初めての見学者なので、部長、俺が文芸部の紹介簡単にしますがいいですか」

「そうだな、一応クラブの見学会ということになっているから、そうするか」

「では、高山さん文芸部の概略を説明します。現在部員は部長が言

った通り四名。三年二年各二名ね。三年は部長の桜木秋灯部長と副部長の音琶美友児さん。そして二年は俺ともう一人今日は来ていない星野童夢^{ホシノドム}。文芸部の活動は各自自由に出筆活動をしており、出席も自由。他のクラブとは少し違うかもしれないな。決まりは一年に一作以上の作品を完成させどこかで発表すること。全員が小説を書いていて部長は歴史小説専門、音琶先輩は恋愛小説、俺がホラー小説でそして星野は社会問題を中心テーマに出筆している。テーマは特に決めていないで自分の好きな分野だな。こうしてみるとみんな違うな。それと文芸部の活動は目立っていないので、何かで結果を残せるようにそれぞれ頑張っているんだ。それは学校主催の読書感想文のコンクールだったり、あと各文学賞のコンクールなどな。何か結果を残せば活動していると見られるから、そしたら後は自由だ。新聞の声の欄に投稿したりでもいい。でも人の目に止まらないとダメだけど。それはそれ以外の時間を自由に使い、活動をしていることを認めさせるための手段だから。それと・・・」

「その先はまだ知らないな」

と部長の桜木さんが言った。なにか言えないことがあるのだろうか。でもちょっと変わったクラブ。部員数に部室に男子だけでもそうだし、そして図書準備室でのコーヒー。でも思ったよりこの部室は本のカビ臭い匂いはしない。日当たりも悪くないし、窓はいつも開けて換気されているようだ。しかしレースのカーテンは、窓の開いている今も引かれている。

「それと高山さんが一番気にしていることだけど、女子がいないのは誘っていないからだと思う。部員の募集も他のクラブと違ってしていなかっただろ。プラカードも作ってはいないし。基本的には部員はここにある椅子の数だけいいと思っている。そして毎年三年

が一人ずつ部員を入れてそれで終わり。私が今年誘ったのがリジンだ。そして部員の選考もクラブの運営も全て部長の私にまかされている」

「じゃ、あと一人部員が決まったら、今年の入部は終わりという事ですか」

「そうなる予定だけど」

なんとというクラブだろ。部員数6名の男子だけの文芸部。そして敢えて部員を増やそうとしていない。普通沢山部員を集めようとするはずだろうに。何から何まで変わっている。

「音琶先輩のほうは入部する一年生決まっているのですか」

「いまのところ決まっていはいないけど・・・まだ、たっぷり時間はあるからね。急いでいない。今、二人候補がいるけど、どうなるかわからないし」

候補って、入部希望者だよな？どうして希望しても入部できないの？ゆっくりコーヒーを飲むために、きつと人数を増やすことはしないんだ。きつとそうだ。

「音琶、その二人も男子だよな」

「そうだけど」

いったい、どういふことか、さっぱりわからない。なんで・・・

「高山さん身長が結構高いけど、小学校の時何か運動はしていたの」

「桜は男子に混ざってサッカーやってました」

リジンが横から答えた。小学校の時は男子よりも女子が成長が早い。身長も男子より高かった桜。でも、中学では女子サッカー部はないので、それでクラブに迷っていた。なでしこジャパンは憧れだ。

「サッカーか・・・」

「女子サッカー部はないですね」

残念ながら女子サッカー部は白樺学園にはない。社会人のチームでさえ少ないのに、中学であるところなんて、あるのだろうか・・・

「そうか、サッカーやっていたんだ・・・」

部長が何か考えるように手を顎に持って行き、立ち上がった。

「音琶、お前の候補の二人は何をやっていたんだ？」

「野球と排球です」

「そうか、野球はいらないな」

なんの話をしているのかさっぱり分からない。どうして、文芸部に入るのに運動部の事を聞かれたのかも不思議だが、ホントさっぱり・・・

「高山さんは運動クラブには行かないの。あなただったら身長も高いから何処に行っても喜ばれると思うけど」

「まだ、なにも決めてないので見学について来たんです。それに・・・」

「そうだな、今盛んに勧誘している時期だからな。でも、どこからも誘われていないの」

「はい。誘われていません」

「そうか、なでしこジャパンを目指しているんだものな。ないよな」

「部長、何考えているのですか」

「音琶、お前と同じことだと思うけど・・・」

そう言って、部長と副部長は顔を見合わせている。
なんなの、いったい・・・

「リジン、高山さんの運動神経は？」

「はい。拔群です」

やだリジン、私はリジンの傍を走り廻っていただけ、楽しかったから。それで体も大きくなって、運動神経もちよつとはいいたいと思うけど。女は運動神経がいいと言われるより、カワイイ、キレイダ、お淑やかと言われたほうが嬉しいのよ。全然女心理解していないんだから・・・

「高山さん、本当はリジンと同じクラブに入りたいんでしょう」

そんな本当の事言われたら、私恥ずかしい・・・

「俺も一緒のほうがいいです」

「えっ！」

どうしたのリジン。そんなこと言うキャラじゃないでしょ。それに私、文芸部に入るって言ってないし・・・

「ほう、そうですか」

みんながニコニコしています。ほのぼのしているのかな？ 青春します！

「高山さんは、どうですか」

「私はまだどこも行くところ決めていないので・・・」

「そうですか、リジンと一緒にいたいのですね」

なんという言い方、でも間違っていない。リジンと一緒にだと楽しいと思うし・・・

隣で話を聞いていた音琶先輩が話しかけてくる。

「あとの一人は僕の担当なので、高山さんが入部希望で部長が許可するのであれば僕が入部テストしますけど」

えー、中学のクラブに入部するのに・・・テスト？ 考えられないけど・・・

「では高山さんが入部希望であれば入部テストを許可します。高山さん、どうしますか？」

どんなテストするの・・・ここまで運動クラブの話をしているから体力テスト？ 文芸部の入部テストで体力？・・・何するの、全く私には分からない事ばかりで・・・でも、このテスト受けないとリジンと一緒に文芸部にはいられないし・・・

「テスト受けさせてください」

「わかった。じゃあとは音琶にまかした。私はこの後ちょっと生徒会行事があるので、今日は解散。音琶よろしくたのむな」

「はい部長」

二人は顔を見合わせて笑った。その後すぐに部長は部室を出て行った。

「それでは高山さん、入部テストですが・・・」

「どんな運動ですか？」

「はあー、そうだね、運動部の話ばかりしたから・・・でも高山さん、ここは文芸部ですよ。文芸部の入部テストでまさかスポーツテストのような事すると思いました。思ってたんですよね。」

「でも・・・」

「でも、なんです、勘違いしました？　ちょっと話が横に逸れましてからね。それでは高山さん、入部テストですが、どんなテストがいいですか」

えっ、どんなテスト？　入試じゃないのだから・・・選べるの？

「えっ、そんなにいろいろあるんですか？」

「高山さんの希望に添ってきめます」

「希望は推薦入部ですけど・・・だめですよね」

「それはだめです。でも推薦はさっき西沢からあったので、多少は考慮します」

リジンの推薦で多少の考慮？

「あのー、リジンは入部テスト受験したのですか」

「俺は部長から言われて受けたよ」

どんな・・・試験と聞きたかったけど・・・聞けない。

「音琶先輩、リジンと同じテストでお願いします」

「それでいいですか」

いいですかと言われても・・・何も分からないし・・・

「いいです」

リジンと二年の荒木先輩が笑っている。おそらく二人にはどんなテストか分かっているわらっているのだろう・・・イジワル・リジン。内緒でアドバイスくれてもいいのに・・・

「音琶先輩、桜は女子なので結構ハードなやつお願いします」

「おう、了解だ」

「ちょっとリジン違うでしょ。女子だからハードでなくて、ソフトでしょ」

「わりい、間違えた。俺の時はハードだったんでつい・・・」

「リジンでハードだったら・・・私なんて絶対ムリ・・・」

今度は音琶先輩がさっきの部長のように手を顎に当てて考えこんでいる。

試験問題を考えているのかしら・・・

「それでは高山さん、入部テストですが・・・明日の放課後この時間までに、小説を書いて来てください。題材は恋愛ものでお願いします。中身はリジンとの恋愛がいいでしょう。原稿用紙10枚です。少なくとも多くてもダメです。きっちり10枚にまとめてください。いいですね」

「えゝっつつ、小説・・・恋愛・・・10枚・・・絶対ムリ・・・」

「高山さんがリジンと同じと言ったのですよ」

同じって・・・リジンも私とのかを書いたの・・・

「大丈夫です。今の高山さんなら20枚でも書けると思うけど」

うっそー、てつきりスポーツテストと思っていたのに・・・でも文芸部だもんね・・・

どうしよう・・・文芸部に入るの止めようかな・・・

07. 婚約発表

音^{オト}琶先輩と入部テストの話が終わり、私とリジンは部室を出た。

今日はもう他のクラブの見学には行かない。明日までに課題の小説を書かなくてはいけないからだ。早く帰って書かないと・・・

結局、今日もリジンと二人で帰宅することになった。
もちろん、手は・・・つないで。

まだ少し肌寒い季節だが、リジンと一緒にだと寒さも感じない・・・
様な気がする。

「ねえー、リジンも書いたの？」

「あー、書いた」

「それで10枚も書いたの？」

「いや、俺の場合は30枚だった。期間も一週間以上もらったからな。でも書いていたら最後は30枚以上になって、30枚に減らすのに苦労したよ。話がまとまなくて大変だった」

「へー、30枚も書いたの」

「大丈夫だって、10枚は楽勝で書ける」

「そんなー、私小説なんて書いたこと、ないんだよ」

「思ったこと書けば、いいんだ」

「そんなー、人ごとだと思って、・・・リジンは何を書いたの？」

「桜のこと書いたと思ってる？・・・残念ながら違う」

なんだ、ちょっと残念。リジンも私との恋愛を書いたと・・・そう
だ、私たち付き合ってからまだ二日だった。リジンが私のこと書くはず
ないな・・・

「ね、何書いたの？」

「そのうち読めるから」

「えっ、読めるの？」

「文芸部の先輩達が読んでいるから、文芸部に入部したら読めるぞ」

「入部できなかったら？」

「俺が読ましてもいいと思ったら読めるけど」

「読まして、直ぐに」

「それはムリだな。第一、原稿は文芸部の誰かが持っているから。
読みたかったら、試験に合格して文芸部員になってから読むんだな。
せっかく入部テスト受けることにしたんだから、俺も入部してから
読んでもらいたいな」

「そっかー、・・・ということは、私のもみんなが読むの？」

「あたりまえ、俺も読むし」

「えー、恥ずかしいなー」

「書く前から恥ずかしいのかよ」

「そりゃそうよ、リジンとの恋愛を書くんだよ」

「バツカ、あれは音琶先輩が迷うと思ってアドバイスくれただけ。恋愛が一番書きやすいからな」

「そうなの」

「小説だからな、事実を書くんでないからな。名前だして、報告なんて書くなよ」

「了解、わかった。でも何を書けばいいんだろ・・・」

「取りあえずテーマは俺との恋愛ということになっているから、そこから思いつくこと書いてみたら。いろいろ題材はあると思うけど。昨日のマックと、新庄姉妹とかもいいかもな」

「あつ、そういうことね。帰ってマンガ読んで勉強しよ」

「バカ。マンガと一緒にすんな。それにそんな時間ないと思うけど。・・・今夜お母さんと話しあるだろ」

そうだ、てっきり忘れていた。リジンも夕食に来るんだった。

「リジンは話の内容知っているんでしょ？」

「だから俺の口からは言えないと一昨日言っただろ」

「そうだった」

「小説の題材が一つ増えるかもな」

「なにその勿体ぶった言い方、教えてくれてもいいじゃない」

「俺から聞くより、お母さんから聞いたほうが絶対いいって」

リジンはそう言って教えてくれなかった。家の前まで来ると、リジンは自宅に向かった。夕食までには我が家に来ると言う。

でも、いったいどんな話なんだろう。朝時間なかったから話できないのはわかるけど、簡単に話できないことなの？

「ただいまー」

「お帰り桜。夕飯はみんな揃ったらね」

「お母さん朝の話・・・」

「それも夕飯の時にね。桜には悪い話ではないから安心して」

「今話してもいいじゃん、全然安心できないよ」

そう言ってテーブルの上にあったチーズケーキを持って二階に上がる。このチーズケーキ大好き。「かごもりキララ」籠に入った冷凍のケーキ。季節によって何種類があるけど、今日のは、淡い桜色の

グレープ味。うまいんだよね。

お菓子に感心している場合ではない。早速出筆活動開始と思ったが、原稿用紙がない。まいったー。買い物にいくのも面倒くさいし、・・・

・そうだ電話しよう。

呼び出し音は鳴っているが・・・

「もしもし」

「リジン？」

「なんだよ」

「なんだはないでしょ。これでも付き合っているんだから」

「わariiー、わariiー、でなんの用だ。今おまえの家に行こうと思

っていたとこだけど」

「あのね、原稿用紙・・・」

「あー、無いのな。別に原稿用紙でもなくてもいいぞ。ワープロで文字数だけ設定すればそれでいいんだぞ。原稿用紙はあるけど、今はワープロ。お前の家パソコンあったろ」

「プリンターもあるけど・・・使えない・・・」

「分かったよ、原稿用紙持って行ってやるから。でもパソコンのほう

が今後楽に書けるから、覚えたほうがいいな」

「リジン教えてくれる？」

「分かったよ、教えるよ。授業でもパソコンあるから、そんなに苦労しないだろ」

「よろしくお願いします。じゃ、原稿用紙おねがいね」

「分かった、今行くから」

そう言ってリジンの電話は切れた。

そうか、パソコンだとケシゴムで消さなくても修正できるし便利かも。でもパソコンあんまり使えないから、覚えるの大変。好きなアイドルグループのホームページへのアクセスぐらいはできるけど。

悩んでも仕方ないので、チーズケーキを食べながら何を書くか考え始めた。ちよっとこのケーキもやばいかも。最近運動していないので、少しというよりかなり太りだした。あんまりデブになったらリジンに嫌われちゃう。

そういえば新庄姉妹は私のこと普通と言ってたけど・・・普通なのかな・・・

自分ではちよっとはいいと思っているんだけど、でもちよっということとは普通か。

T168 B82W56H84 w48・5 私のサイズ。エビちゃんと同じサイズよ。体重はわかんないけど。中学生では大きいほうだと思うけど、リジンは私より10センチも背が高い。この数字はちよっと前の数値だから今は体重50キロになっているかも・・・ヤバイ、やっぱ定期的な運動は必要だね。

キッチンから美優の呼ぶ声が聞こえる。

「桜ー、リジン君見えたわよー」

「はーい」

台所に行くときリジンが既に食卓テーブルに座って、リジンの前にはジャスミン茶が置かれている。リジンが座っている場所はいつも私の座る隣。そういう配置ね、了解。向かいには美優と康太郎か。

「康太郎は？」

「父親のこと康太郎と呼ぶのやめなさい。お父上と言いなさい」

「バカ、我が家はそんな上流階級ではありませんよ」

「ごめんなさいねー、リジン君こんな桜で。バンバン言って駈けてくださいね」

「はー、リジンは私の保護者ではありませんよー」

美優は私にもホットのジャスミン茶を出すと、康太郎を呼びに行った。食前にジャスミン茶は頂けないなー、少し糖分のある飲み物ではないと・・・油の匂いもするけど、それでジャスミン？　せめてオレンジジュースがいいなー。

メニューは何？

小さな赤い鍋がテーブルの上に二つ。もしかして・・・でも油の匂いもしたけど・・・

美優と康太郎が来た。

「桜、固形燃料に火を付けて焦がさないように混ぜてね。牛乳を少し入れて」

「お母さん、これって・・・」

「見たら分かるでしょ。チーズホンデュとチョコホンデュよ」

「これ、でも、パパとママの酒の摘みでしょ」

「うるさい、つべこべ言わないの」

全くどうしようもない親だ。今日は父も休みだったので、昼間から酒を飲んだようだ。その摘みの余りが夕食？ リジンも来ているのに・・・

「あんたたちも食べなさい、美味しいわよ」

「これが夕飯？」

「心配しないで、ちゃんとあるから。リジン君も来ているのに、そんな訳あるはずないでしょ。桜だけだったら、これでOKだけど」

「桜、運ぶの手伝って」

出来た料理を運ぶ為に流し台のところに行くと、幾つかの料理が出来ていた。油物は唐揚げだった。酒の摘みの延長だ。それとお赤飯？ なんで・・・でも私は母の甘納豆のたくさん入ったお赤飯は大好きだ。母は北海道流よと訳の分からない事を言っていたが、北海道では赤飯に甘納豆をたくさん入れるのだろうか・・・美優の言っていることはどうも信用ならない。

今日の食卓はチョコホンデュとチーズホンデュ。唐揚げと、何故か甘納豆のたくさん入ったお赤飯だ。赤飯以外は父と母の酒の摘みの様な気がするが・・・

「リジン、こんなんでごめんね。美優がおかしいから」

「全然すごいごちそうだよ。唐揚げ大好きだし、チョコバナナは大好物。おばさん僕の好きな物作ってくれたんですね」

「リジン君のお母さんに聞いたの」

「なんだ、そうだったんだ。でも、なんでお赤飯？ リジンが来てくれての夕飯に・・・」

「それを今から話すわね。まずは食べましょ。康太郎、何飲む？」

「なんでもいい、まかせるよ」

「そう言うと思って、とっておきの物があるのよ」

母が冷蔵庫から出してきたのはドンペリゴールドだった。グラスは4個？

「お前・・・いったい、どうした？」

康太郎は驚いて目を丸くし、母を見詰めた。

「康太郎は忘れているかも知れないけど、私達の結婚祝いで貰ったの。大切な時のために取っておいたのよ」

「女優、これ今いくらするか知ってるか・・・」

「値段なんかどうでもいいでしょ。桜と一緒に飲めるのが嬉しいわ」

「でも、あなたたちはまだ未成年だから、こっちの小さいグラスでね」

「そうだな、飲む機会なんてないだろうから、せめて味は覚えておいたほうがいいな」

康太郎がそう言った。

なんか、ドンペリは高価な物だとは聞くが、そんなに美味しいものなのだろうか・・・

中学生には理解できない。

ちよっと大きめのシャンパンクーラーに入れられて、テーブルの上に置かれたドンペリ。

私とリジンの前には小さなシェリーグラスが置かれた。

「これで準備OKね。じゃ、乾杯の前に重大発表よ。桜いいわね」

「そんなもったいぶらないでいいよ。早くたべようよ」

今夜の話は、おそらくリジンも知っているはず。知らないのは私だけ、なんか緊張してきた。

「桜、あなたはリジン君と結婚するの」

「結婚？」

ビ
ッ
ク
リ、
マ
ジ
・
・
・

07. 婚約発表（後書き）

こんにちは、文芸部部長の桜木秋杜です。父浩介がサッカー好きで、この名前です。母のトモに愛のシュートを決めたからだなどと、訳の分からない事を言っています。でも、俺もこの名前気にしています。俺もそのうちに誰かに愛のシュート決めます。

作…今回登場人物の名前に凝ってしまいました。少しやりすぎたかなと思っていますが、今後ストーリーにも関連してきます。

08. ドンペリとお赤飯

母の話に、マジ驚いた。私とリジンが結婚・・・だ、なんて。

でも、実感が湧かない。確かに今好きで付き合っているけど、私の気持ちなんて関係ないところで決まっていたなんて・・・言葉がない・・・

「じゃ、乾杯ね」

みんなのグラスにドンペリが注がれた。私とリジンは小さいけど。注がれただけで甘い香りが立ち、美味しいような感じがする。

私は結婚の話に驚いて何も言葉が出なく、つられて乾杯した。今朝母が言っていた結婚すると言っていたのは嘘では無かったんだ。どうして、いつき決まったの・・・

四人でグラスを持ち上げた。

「カンパーイ」

三人の声。

香りと味を確かめるように静かに飲む三人。私も口を付ける。

・・・オイシー！ ちょっと癖になりそう。

これでやっと、ドンペリとお赤飯の意味が理解できた。お祝いだっただのね・・・本人が拒否することなんて、考えなかったのだろうか。それにリジンも反対しないの？

「桜、今朝言った結婚の話はこれで冗談でないって分かったかな」

「うん・・・赤飯もあるし・・・冗談ではなさそうだけど・・・」

「何か不満そうねー」

「よくわかんない」

「これからゆっくり話すわね。リジン君にも、全て話をしている訳ではないし」

「え、そうなんですか。まだ、あるんですか」

「まず、食べましょ。リジン君もたくさん食べてね。お酒はそれでおしまいけど」

スパークリングワインは口当たりも良く、お酒が初めての私でもいくらでも飲めそう。あんまり驚いたから、もう少し飲みたい・・・未成年はダメか・・・

（今回はお祝いなので特別です。三三九度と同じと考えてください。未成年の飲酒は犯罪で厳禁です。成長にも害を及ぼしますので注意してください。..作者）

食事をしながら、ゆっくりと美優が話し始めた。

「リジン君と桜の結婚は、リジン君の両親と私と康太郎で相談して決めたの。もちろんあなた達が同意することが大切だけど、私達四人の親はリジン君にも桜にも同意して欲しいと思っているの。だから結婚が正式に決まったのではなくて許嫁ね。約束をしたと捉えて

もらえればいいわ。それでこれから二人の同意がもらえれば話は進めるけど、仮に二人に同意されなかったら話しは終わりね。でも私達は同意してくれると信じているの」

「リジン君の両親と、私達夫婦は昔からとても仲が良かったのよ。そんな友達同士が自分達の子供が結婚してくれたらと約束するのは、そんなにおかしな話ではないでしょ」

父はお酒を飲み静かに、リジンもから揚げを食べながら聞いている。私は・・・ドンペリのおかわりが欲しい・・・

「それで許嫁というふうにしたの。許嫁に憧れみたいなのもあったのね、ステキな言葉でしょ。でも絶対に結婚しなくてはダメとは言っていないわ。あくまで二人の問題だからね。それでリジン君も桜も同意してくれたら、親として応援しようと考えて、最近リジン君には話しをしたの。桜には言っていなかったけど。親に応援される恋愛もいいと思わない」

ふーん、ちょっとステキかも。リジンと付き合いたいなんて、悩むこと無かったのかも・・・

リジンが同意してくれるのなら・・・私のこれからは、バラ色になるかも？

「でもこれはあくまで親の希望で、決めるのは二人よ。この先何があるかわからないし、二人に別に好きな人ができる可能性だってあるしね」

「二人が嫌だったらやめればいい」

康太郎、どうしてそう悪い方に考えるかなー、私いやだなんてまだ

言っていないのに・・・

私の気持ちは良くて、リジンが・・・

私は思いきってリジンに聞いてみる。

「リジンはどう思うの」

「俺も最初聞いたとき驚いたけど、別に今すぐに結婚する訳でないし・・・それに桜だったら問題ないし・・・俺はいいと思ったけど」

「問題ない？ 私が？ ホントに私でいいの？ 後悔しない？」

「そう思ったら付き合ったりしないな」

「えっ、あんた達いつから付き合っているの？」

「・・・きのう」

「昨日？」

美優も康太郎も笑いだした。そんなに可笑しいだろうか、それとも嬉しいのだろうか。

いや、ドンペリがあまりに高級なお酒なので脳までイカレてしまったのかも・・・

「そお、だったら問題ないんでない？」

母のそんな言葉ではあるが、いろいろ問題はあると自分でも思う。いろんな事でしられて恋愛はできるだろうか、確かにリジンは好きだけど、結婚ってそんなに簡単に決めていいのだろうか。普通親が心配することを自分で心配している。

「いいんじゃないか、あまり縛られないで中学生らしく自由に恋愛すれば」

たまーに、父も真ともな事を言うもんだと思った。その通りだ。

「そうだね、楽しく学校に行けばいいね」

美優の言葉も少し柔らかくなった。そうするよ美優、康太郎。私はこれから青春なんだから・・・

「さっきリジンに全てを話してないと言ってたけど、まだ何かあるの？」

「あ、そうだったわね。ここまではリジン君も話しは聞いて知っていたわね」

「はい」

「これからの話はリジン君のご両親からも了解を貰っているから、そのつもりで聞いてね」

母はそう言って父の顔を見た。父は頷き了解という意味表示をした。

「康太郎と私が結婚する前にお互いに結婚を約束した人がいたの。それが康太郎はリジン君のお母さんで、私はリジン君のお父さんだったの。これは本当に偶然よ。結婚してから分かったの。私とリジン君のお母さん、由美さんとは同級生で高校ではクラブも一緒に仲も良かったわ。高校時代は同じ人を好きになった事もあったの。もちろんリジン君のお父さんでも、康太郎でもない人ね。そんな由美

とは高校卒業してから会う機会がなくて全然会っていなかったわ。そしてお互い恋愛をして結婚してもいいと思える人に出会ったの。それが由美さんは康太朗で、私が西沢さんだったの。でも、結婚を決めても最後には別れてしまったわ。理由はそれぞれあったけど、今あなた達に話すことではないわね。それで別れて互いに結婚して1年ぐらい経ったところかな、偶然にふるさとであったの。びっくりしたわ、なんとなく分かるでしょ。友達の結婚相手が、自分の別れた相手だなんて。それもお互いに。でね・・・」

その後の美優の話は衝撃的だった。最初四人は驚いたが、暫くして母親同士互いに今までの事を打ち明けたのだ。そこから蟠りもなく四人で付き合い出す様になり、そんな四人が親戚になろうと考え、自分達に子供ができたら結婚させようと約束したそうだ。勿論、男同士、女同士だとムリだが、そんな事は考えなかったそうだ。一人目でダメなら二人目と考えていたそうだ。

本当に信じられなかったけど、事実なのである。でもよく、自分の結婚相手だった人の相手を受け入れたものだ。自分の親でありながら感心する。きっと今でも好きなんだろうな。そんなことは絶対態度に出さないだろうが。

あつ、学校で美優とリジンのお父さんが・・・
父には内緒にしておこう・・・

でも、こんなことを子供に話をする親がいるだろうか、いてもごく稀だと思う。変わっているのか正直なのか、よくわからない・・・

「今の話は、もしリジン君と桜が結婚すればいずれどこかで分かると思うから話をしたのよ。一緒にならない時は忘れてね。二人を信

じて話したのだから、その事をよく考えて行動してね」

私とリジンは頭を静かに垂れた。了解、だれにも言わないから、心配しないで・・・

あつ、こんなこととしていられない。小説の宿題・・・

「お母さん、私ちょっと用事あるので、部屋に行くね。あとはみんなで、ごゆっくり」

「珍しいわね桜、何の用事なの」

「詳しい話はリジンに聞いて。リジン原稿用紙、サンキューね」

そう言って私は部屋に向かう。ほんの少しアルコールも入ったので体が温かい。眠くならないだろうか・・・心配。

「リジン君、桜の用事ってなんなの？」

「クラブの、入部テスト勉強みたいもんです」

「えっ、クラブに入部テストなんてあるの？」

美優さんが不思議そうに聞いてくる。

「殆どのクラブはありませんが、一つだけ特別のクラブがありました・・・」

「それって、もしかして文芸部？」

「お母さん、どうして知っているんですか？」

「リジン君、私は白樺学園のOGよ」

「そうでしたか」

「でも桜、入部できるの？ 文芸部、昔は男子だけだったけど」

「昔も男子だけだったんですか」

「そうよ、男子が必要とされてたからね。本当に桜、入部できるの？」

「桜の場合は大丈夫です。桜には内緒ですが、部長も桜の入部を認めたようでした」

「男子でなくてもいいの？」

「そうみたいです」

「でも、あの子にそんな能力あるかしら」

「あると部長が認めたのだと思います。でなければ、入部試験なんて認めないと思います。まして女子ですから」

「リジン君は？」

「もう一人の1年は僕です」

「そうよね、リジン君なら問題ないけど・・・えっ、じゃ1年の文

芸部はリジン君と桜なの？」

「はい、そうです」

「へー、そうなの。私、鼻が高いわ」

「そんなことないです」

「えっ、私の鼻が低いって、言っているの？」

「おばさん、酔っていますね」

「ちょっとね、だって今夜とても嬉しいんだもの。リジン君と桜が上手くいきそうだし・・・それに二人揃って文芸部ですって、本当に嬉しいわ」

「美優、文芸部に入るのがそんなに嬉しいことなのか？」

「あー、康太朗は学校違うから知らないわね。文芸部は、白樺学園では特別なの」

「何が特別なんだ」

「簡単に言えば、スポーツの特待生みたいなもの・・・だよ。今もそうでしょ」

「そうです。おばさんの時も学年二人でした？」

「そう二人よ。私のクラブもお世話になったわ、運動部でなかったけど。練習も少ないのに本当にいい声で上手かったわ」

「そうですか、文化系のクラブにも行くのですか」

「そうよ、そのための文芸部だから要請が来たらどのクラブでも助っ人で行くのよ」

「なんだ、そのクラブ？」

康太郎が驚いている。酒も入っているので頭の回転も鈍っているのか・・・

「康太郎はいいから、ドンペリ飲んでなさい・・・あつ、全部飲まないで私にも残してね。でも、ちょっと心配だわ、リジンと桜が一緒に文芸部に入ったら・・・」

「どうして、ですか」

「リジン君もこれから分かんと思うけど、文芸部って本当に特別なの。スポーツも万能だし、学力だって優秀だし、桜、学力に問題ありでない？」

「俺は桜にはよく入学できたなとバカにしていますが、大丈夫だと思います」

「それならいいけど、リジン君桜を助けてあげてね」

「はい。でも桜は大丈夫ですよ」

「そうお、それと文芸部は生徒の注目を集めるから注意してね。1年生の二人が婚約しているなんて知れたら大変ね。隠さなくてはね。」

リジン君うまくやってね」

「わかりました」

「で、リジン君。桜の勉強って何をやっているの？」

「入部はもう決めていると思うのですが、文芸部という名前ですの
で入部テストとして、明日までに小説を提出する試験になったん
です。おそらく根性があるかないかのテストも含めて、先輩の遊び心
です」

「小説？ 確かに文芸部ね。それでどんな小説？」

「恋愛小説です。明日までに原稿用紙10枚書いて提出なんです」

「へー、桜、恋愛の経験なんてないのに書けるのかしら」

「おそらく、大丈夫です。ヒントを教えましたので。さっきのおば
さんの話も題材になると思います」

「そう、それは楽しみね。できたらみんなで読みましょね」

そう言って三人で大笑いした。

09. 今日も始まる・・・

ネムーイ・・・昨夜、結局徹夜で課題の小説を書き上げた。小説の要件を満たしているかどうか心配だが、原稿用紙10枚は埋めた。内容も不安だらけ・・・リジンに言われた通り私とリジンの実名は避けたが、私達を知っている文芸部の人が読んだらバレバレだと思う。分かっていても良いように、内容もかなり控えめに表現しておいた。

台所に行くと美優はもう起きて、朝食の準備と康太朗と私のお弁当を作っている。

母の作るお弁当は彩りがキレイ。いつも青、赤、黄色が必ず入っていて見るだけで楽しい。卵焼きはこだわりで、何時も中に何か入れて焼いている。刻んだワカメだったり、魚肉ソーセージとかカニカマを巻いたりだ。今日はハウレンソウのお浸しを巻いてある。

本日の主食は一口おにぎり、一口大のおにぎりをラップで包んで弁当箱に詰めてある。6個もあるが中身は不明。その日によって、天むすびだったり、から揚げだったり、ごはんは青菜もよく入る。食べないと分ならずその日の気分が変わりはするが、お弁当は時間と愛情を注いで作っている事は私にも良く分かる。

でも、自分のお弁当は絶対に作らない。美優はお弁当を持って職場で食べることを嫌う。どうしてかと問うと・・・キャリアウーマンは、「お昼はステキなレストランでランチよ」と、訳の分からない身分不相応なことを言う。本当は持ち歩くのが面倒なのだと思うが、時間の不規則な仕事をしている母が行動し易いように持たないのかも知れない。本当にどうしてか、真実を私は知らない・・・

「あはよう」

「桜、目が真っ赤よ。失恋でもして泣いたの？」

「ちがうわよ・・・それに昨夜言ったでしょ、付き合ったばかりだ
って」

「へー、じゃ小説はできたの？」

昨夜リジンが事情を説明したのね、それで知ってる訳ね。

「なんとかね」

「じゃ、読まして」

「ダメ、絶対ダメ」

とっても恥ずかしくて読ませられない。と言うよりそんな時間はありません。でもこれを文芸部のみんなが読むのかと思うと、こんな内容で良かったのか改めて考えてしまう。でも書いてしまったし、時間もないのでこれを提出するしかない。

時間はまだ7時過ぎ、こんなに早く起きるなんて遠足か運動会以来だ。

あつ、そうだ昨夜は寝ていないので早起きではないな。

熱いシャワーを浴びて、甘いホットココアとハニートーストを食べよつと・・・カロリーが心配だけど、すごく甘いものが欲しい。チョコレートドリンクも好きだけど、今朝はなんとなくココア。ホットココアにマシュマロを浮かべてココアパウダーをふりかければ、モアベターね。ついでにココアの中にチョコレートをタップリ入れ

れば、モアモアベター。これだと完全に朝からカロリーオーバーでデブになって、リジンに嫌われてしまう。

テレビドラマ『ビバリーヒルズ青春白書』のジェシカ・ストロープとシャネー・グリムくらいスタイル良く痩せたーい。・・・絶対ムリ。

私も今友達の間でも流行っている、バナナダイエットしてみようかな・・・

安くて食べやすくて繊維質も多いから、絶対にいいに違いない。やってる友達も痩せているし、・・・私でも痩せられるかしら・・・

寝てないし、今日もきつと忙しい1日になるので、朝シャンでもしてスッキリ・カワイクくなって学校に行こっと・・・もうすぐリジンも迎え来るし、早くしないと・・・

「お母さん、ココアとハニートーストね、チョコレートも入れて・・・お願い」

そう言い残して私はシャワーに向かった。

登校の準備が全て整い、鞆に原稿用紙10枚の入部試験の課題を持ってキッチンに行くと、昨日と同じようにリジンが食卓テーブルに座っていた。私とお揃い、と言っても我が家に同じ物が5個もあるマグカップでココアを飲んでいた。んー、チョコレート匂いがしないので、チョコレート抜きか・・・

「お母さん、チョコレート抜き？」

「桜、チョコレートの買い置きなんてないわよ。桜のオヤツになるのが分かっていて、買ってきませんよ」

「マシユマロも？」

「あんたね、うちはコンビニではないのですからね、欲しい物が直ぐに揃うわけではないでしょ。桜が結婚して主婦になったら、常時冷蔵庫に入れて置くのね。でも、そんなことしたらリジン君に嫌われるかもよ。ね、リジン君」

「はい。でも桜が好きなら、それでもいいと思いますけどいけませんか。僕も好きですし・・・あつ、チョコレートがです」

「そ、そ、そうね・・・リジン君がよければ・・・へー・・・」

リジンの返答は私が好きなら許すみたいに聞こえて、母も驚いた様子。頷きながら、本当に付き合いだしたのね、みたいな顔をしている。微妙・・・子を心配する母親の心境になったのかな・・・それとも喜んでいる？

リジン分かった、了解よ。リジンと結婚したらチョコレートとマシユマロを冷蔵庫に常備して、毎朝愛情のタップリ入ったココアをマシユマロとチョコレート付きで飲ませて、あ・げ・る・ね・・・明日の朝から練習してみようかな？・・・

ハニートーストは特別サービスで食パンを半斤使って、中身を切り取ってハチミツタップリに浸して私の愛情と一緒にパンに詰め込んで食べさせてあげる。もちろんガツチリとオーブンで焼いてバダーも流し込んで、最後に大盛りでアイスに乗せてあげる。アイスは常時3種類ぐらい。定番のバニラに私の好きな練乳に・・・あとはリ

・ ジンの好みに合わせて準備するわ・・・楽しみ・・・ラブラブね・・・

でも、こんな事するのだったら何時に起きればいいの・・・それにリジンは自宅で朝食食べて来るのだし・・・我が家で朝食、食べればいいのに・・・

バカ・・・私、何考えているのだろう・・・

「桜、顔・・・赤いけど・・・熱あるの？」

変なこと考えてたら、顔が赤くなったのだろうか。

「えっ、い、いまさっきシャワー浴びたからだよ・・・」

「そうお、なんか、変な桜ね・・・」

小説書きながら妄想していたら、変な癖がついて何でも先の先を考えて想像してしまう・・・それも自分に都合のいいように・・・なんか、小説書くのも以外と楽しいのかも。昨夜は時間がなくて追い詰められていたけど、趣味で一晩に原稿用紙二枚くらいだったら本当に良いと思う。日記の替わりとして書くのも名案かな。

「リジン、入部試験の小説なんとか出来たよ」

「おまえ、寝ないで書いたの。目も赤いし顔もむくんでいる見たいだけ」

「ごめんね、むくんでいて。いつもこうですよーだ」

「そうか、そう言えばそうだった」

もー、ホントにわかってない。

「バカ、女心全然わかってない。よく頑張ったな、くらい言えないの」

「よく頑張ったな」

「んもー・・・」

「朝から痴話げんかしていないで、早く食べて学校にいきなさい」

母の声で現実に戻った。もうそんなにゆっくりしている時間がない。甘いココアで元気がでた。ハニートーストも美味しかったけど、バターの上にアイスはあったけど、ハチミツは無かった。ハニーではない・・・

「いってらっしゃい」

リジンと二人で家をでると、直ぐに恋愛最強姉妹、新庄姉妹と遭遇。

「朝からあんまり、見せつけないで」

「はいはい」

「おはよう、リジン」

「おう、おはよ」

「リジン、桜と別れたら私達がいるからね。直ぐに別れてもいいよ」
友香のキツイ、一発。

「友香、朝一からそんな話しないでよ、もー」

「桜、学校の噂に気をつけなさいよ。みんないろいろ言っているんだから。ま、リジンがカッコイイから仕方ないけど」

私はこの前の、桜は普通が気になっている。私だってそこそこイケテルと思うのは、やっぱり自惚れかな・・・あたりまえか・・・

「新庄姉妹はクラブどうした、決まったか」

リジンが雪香に向かって聞いた。今、ホントはクラブの話に触れて欲しくないけど。

「私達は卓球部に入部することにしたわ。福原愛をめざすの」

「へー、福原愛ねー。花嫁修業で」

私は自分の話にならないように、新庄姉妹の話で盛り上げようとした。

「そうよ、愛よ愛。花嫁には愛が必要でしょ」

全然関係ないと思うけど、でも双子でダブルス組んだら強くなるかも知れない。そう言えば新庄姉妹と付き合っていた双子の石橋兄弟はスポーツ少年団で卓球のダブルスを組んでいるのを友香から聞いたことがある。影響されたのだろうか。

「愛・・・全く関係ないと思うけど」

「いいの」

雪香と友香が二人で前を歩き、私とリジンが後ろで並んで歩いている。今日手は・・・繋いでいる。・・・許嫁だからいいの、内緒だけど。

雪香が後ろを振り返り、私達が手を繋いでいるのを確認すると、

「リジン、私達の前で手繋がなくても、いいんじゃない。この前告白して振られた相手に対して、ちょっと冷たいと思わない？」

「そうか、じゃ雪香も手繋ぐか？」

「ハァー、何、言ってんのリジン。もー」

私もちょっと大きな声を出してしまった。人の気持ちも知らないで・・・女を分かっているじゃない。でも、ここは余裕を見せて黙っていたほうが良かったのだろうか・・・

「いいえ、ご辞退申し上げます。後で桜に殺されるかも知れないからね」

「そうそう、分ればよろしい」

「何、桜その言い方。感じ悪るー」

だって・・・許嫁の前で他の女子と手を繋ぐのは、やっぱ拙いだし

よー。リジンも軽率な発言は控えてほしいなー。でも、リジンには言えない・・・余程新庄姉妹に許嫁だと告白したかったが、私から言えることではないし、言う必要もない。問題も出るだろうし・・・でも、リジンが発表するのだったら、私は同意するだけ、リジンにおまかせ。

「桜、気づけたほうがいいよ。そういうの態度に出ると、後で大変だよ」

私も仲のいい新庄姉妹と思って冗談半分に言ったけど・・・今後は気をつけます・・・

「ところで、お熱いお二人さんのクラブは？」

きたきた、ついにきた。これからどうなるのか・・・リジンと同じ文芸部の入部テストを受けたと知ったら・・・

10. 夢・夢・夢

「リジン起きて、朝だよ」

「桜もう少し寝かせろよ・・・」

「早くしないと仕事に遅れるわよ」

「いいよ、今日は仕事休んで桜と一日ゆっくり・・・ドライブでも行く?」

「早く起きて、ハニートースト焼けているよ・・・」

「今日のアイスはなんだ、今日はツインベリーチーズがいいな・・・」

「いいよ、ちゃんと買ってあるわよ・・・」

・・・幸せ・・・

突然背中を突かれて目が覚めた。一時間目から居眠りしていた・・・

でも、ちょっといい夢。もっと続きが見たかったけど、あの後どうなったんだろう・・・

お目覚めのチューなんて・・・したりして・・・

こんな夢だったら先生に怒鳴られてもいいかも・・・
幸せな夢だった。あんな夢みたいな生活だったら、直ぐにでもした

い・・・

実際、夢だったのだが・・・

「桜、居眠りなんかしたら先生に睨まれるわよ」

友香に注意された。私を起こしてくれたのはリジンだったが、友香も雪香も私の居眠りには気がついていたみたい。・・・やば。

今の夢は私の願望？ それとも現実を起こるの？

結婚すればあり得る話だけど、・・・中学生が朝から、居眠りで見
る夢ではないよな！

H系の小説も読まないのに、チョットそっち系も入ってた・・・

昨夜の徹夜やっぱりキツかった。朝熱いシャワーを浴びたのに、頭
がボーッとしている。

やっぱりハチミツが足りなかった所為で栄養不足？

ファイト・桜、頑張った。自分にそう言い聞かせたが自信は無かつ
た。教室はそんなに暖かいという訳ではないが、体温が高く、熱い
くらいだ。寝不足か、やっぱ・・・

そう思っているとチャイムが鳴って、一時間目の数学が終わった。
結局、授業の記憶は何もない。数学は大丈夫。公式さえ覚えればな
んとかなるでしょ、・・・わかんない時、私には強い味方がいる・・・
・そ、許嫁のリジン。教えてくれるよね・・・

「桜、眠たいのは分かるけど我慢しろ。先生睨んでいたぞ」

リジンにそう言われても、睨まれた覚えも・・・ある訳がない。眠

っていたのだから。

「あんた、良い度胸してるわ」

友香も私に話し掛けてきた。まだ、頭がぼやけてスツキリしない。

「はいはい、注意します。また寝たら起こしてね」

私は三人にそう言うと、みんなは「バカ」と言って起こしてやらな
いと笑う。

今日から授業が始まったと言うのに、最初の時間から居眠り・・・

今日は長い一日になりそうだ・・・

11. 恋の授業

ここの学校のカリキュラムは他の学校とくらべると、かなり変わっている。

変わっているというよりも、新しい時代が求めている新しい資質の能力を育成するため、独自のオリジナル教科をカリキュラムに組み込んでいる。

特に心の人間教育に力を注ぎ「人間」「読書」「創造」などで具体的に展開し、自立した積極的な姿勢はこの中から育成されると考えられている。

55分授業（平日6コマ、土曜4コマ）の導入により、第二、第四土曜を休みとしながらも34単位（完全6日制と同等）の授業時間を確保し、ゆとりをもって授業をしている。

公立中学より、国語、数学、英語の学習時間を大幅に増やし、内容の充実により基礎学力は格段に向上している。

尚かつ、独自の人間教育科目の「人間」「読書」「創造」の学習が心にゆとりをもたらしている。

人間の授業では・・・進路教育とアースコンシャスな柱に、豊かな人間性を育むために参加・体験型の授業形態をとっている。それはディベートやロールプレイを取り入れたワークショップを展開し、インターンシップも経験する。自分達がさまざまな角度から自分の生き方を確立できる人間的な力を養うことが目的だ。

創造の授業では・・・公立中学で一般に行われている「技術・家庭」の授業を改造した授業を実施。自然を体感し五感を開いてものを感じる心を育む「森」、インターネットで世界の人と対話する「国際」、男女が協力し世界の料理を作り環境問題も学習する「調理」、ワークショップを通して全体的な視野を身に付ける「グローバルランニング」の4分野からさまざまなテーマを盛り込み、創造性と国際性の育成をめざす。

読書の授業では・・・国語の授業の一貫として自然、社会、人間に関わる全ての分野の本を読み、さまざまな世界を知ることにつとめ、柔軟な感性と深い思考力をつける。この思考力が基礎学力にもつながる。

（このようなカリキュラムの中学は、中国地方に実在する）

この読書の授業を受け持っているのが、文芸部の顧問でもある木野葉杜先生だ。

実は先生は名前（本名）を聞けば誰でも知っている現役のミリオン作家だが、その事を知る人間はこの学校では文芸部の部員だけで校長すら知らない。

広まると問題も発生しかねないので、公表しないことにしている。

木野葉杜先生は本業が恋愛小説だが、この授業では筆者の考え方、本の選択の仕方などを中心に講義をしているが、読書だけの時間もある。

あまり力を入れて、一生懸命に生徒に教えるというようなスタイルではない。

しかし、週に一時間だけ力を入れて授業する。生徒にも人気があり、葉杜先生がこの学校の先生の中でもダントツに人気があるのは先生

の容姿のこともあるが、この授業の影響が大きい。

普段は生徒の自主性にまかせ、生徒には気楽な授業。でも週に一時
間だけ、興味を惹かれる授業をする。生徒に人気がでない訳がない。
まして容姿はモデル並に美しい。

男子生徒はうっとりしながら、女子生徒は憧れながら授業を聞い
ている。

暇な時間でも居眠りなどする生徒など皆無だ。

その人気の授業とは・・・恋の授業だ。

恋愛小説が本業なので、力の入れ方はハンパではない。しかし、恋
愛小説を授業で読むことは出来ないので、題材は・・・

4500首ある万葉集だ。

週に一首、先生が選択し、作者の気持ち、時代背景、相手の気持ち、
解釈などを生徒と共に勉強する。

今まで木野先生が授業で勉強したものは全て恋の歌。

最初は生徒も・・・なんだ、万葉集か・・・などと言っていたが、
恋の歌、それも自分達にも分かりやすく話をするのが興味もあり、
最近では葉杜先生の授業で何時この授業が、いつあるか楽しみで仕
方がない。その授業は予告なしに、突然始まるのだ。
万葉集より恋の話がメインだ。

週何時間もある読書の時間。国語の時間でもあり得るので、期待す
る生徒はいつ始まるのか噂話で盛り上がる程だ。

その授業が今日の最後の授業、6時限目の国語だった。

初めてなので、最後の10分間だけだったが・・・

一年生だから、誰もこの授業の事は知らなかった。噂で聞いていた生徒もいなくて、知っていたのは兄や姉のいる一部の生徒だけだろう。

それも詳しくは知らなかったと思う。

私は後になって文芸部の桜木部長からこの話を聞いて、最初の授業を納得した。

最初なのであまり興味を示している生徒はいなかったが、それでもあの授業が続くと面白くなりそうな感じは受けた。

最初はみんな先生を見て、うっとりとして惚れだった。

もう少しで今日の授業もこれで終わりという頃、先生の話は始まった。

「これから卒業まで読書と国語の授業、ガンバッテくださいね。」

そう言って、次ぎの読書の時間までにこの歌の意味を考えて来てくださいと課題が出された。

『我が背子に 我が恋ふらくは 夏草の刈りくれども 生ひ及くごとし』（作者未詳）

「万葉集は4500首の歌があるけど、その7割が恋の歌なの。あなた達もこれから恋をすると思うけど・・・もう経験している人もいるかな?・・・日本の文化を理解することはとても良い勉強になると思うし、日本人として必要でもあるわね。それで来週までこの歌の意味を考えて来てください。人それぞれ感じ方は違うと思う

けど、作者の意図を考えて自分なりの解釈をしてくること。いいわね」

最初の授業から宿題・・・それも万葉集。やっぱ白樺学園、レベル高っ。

これが、これから始まる恋の授業の始まりだった・・・

まだ初恋だって経験していない同級生も多いのに、授業で恋の勉強・・・

「あなた達・・・恋・・・経験・・・」この言葉が発せられただけで教室の空気が変化した。

12. 万葉ラブストーリー

『我が背子に　我が恋ふらくは　夏草の刈りくれども　生ひ及くごとし』

彼を想う私の気持ちは、まるで夏草のようだ。刈っても刈ってもこの想いは止めることなどできない・・・

宿題にだされた歌の意味を考えながら、ボーツとしていた。

まるで今の私の気持ちかも・・・恋愛経験は少ないけど、リジンのことを想うと、なんとなくわかる様な気もする。

初めてだから、よけいそう思うのだろうか・・・

現代のように、自由に恋愛ができる時代ではなかったのであろう。それ故に、尚更想いが強く深かったのかも知れない。

ミスチルの「君が好き」もいいけど、万葉集も・・・ちよつと、・・・かなりいい感じ。

もし、文芸部に入部できたら、万葉集も少し読んでみようかな・・・

授業が終わり、約束の時間が近づく。

原稿用紙10枚の私の処女作を持って、部室となっている図書準備室に向かった。

部室には全員集合していた。

三年部長の桜木秋灯さん。同じく三年副部長の音琶美友児さん。

二年の先日というか昨日、私に文芸部の紹介してくれた荒木剣士さん。それに昨日はいなかった、星野童夢さんもいる。授業が終わ

って間もないのに、顧問の木野葉杜先生も来ていた。そこにリジンと私が入った。

部長の桜木秋灯さんが話しだした。

「それでは、新年度最初の文芸部のミーティングを始めます」

私は、えっ……と思った。まだ入部が決まった訳でもないのに、最初のミーティング？ それともミーティングで入部を決めるのかな？

「桜木君、一年生はこの二名なの？」

授業で男子がうつとりしていた、木野先生が部長に聞いた。

「はい先生。この二名で決定です」

私はまだ試験の課題も提出していないので驚いたが……

「文芸部に女子なんて記憶にないけど……」

「はい先生。僕も記憶にもありませんが、おそらく開校以来二人目だと思います」

「そう、じゃ文芸部を作った、あの伝説の人以来二人目ということ？」

「そうです。女子も必要だと思いますし、それに高山だったら入部資格あると判断しました」

「そう、貴方が決めたのなら、私は何も言うことないわ。文芸部に女子も入って、この学園も少し変わるのかしら」

「スポーツも芸術活動も、向上していくことを願っています。そのためにも高山を入部させました」

ちょっと、カッコ良くない？

私には部長の言っている意味が、良く理解できていないけど。

文芸部に入部して、小説を書くだけなのに・・・向上？

「高山さんと言ったわね」

「はい」

ホントに綺麗・・・というよりカワイイかも。

男子が夢中になるのが分かる。私も将来、こんな風にカワイクになれるかしら・・・

「さっきの私の授業で、ずっとボーツとしていたけど、最後の課題だけは目を輝かせていたわね」

部員の上級生は、えー・・・と言う顔をしている。木野先生の授業で、寝ぼけている生徒なんて考えられないのであろう。しかたない一年生だし、それも最初の授業だ。しかし、これからはそんなことは絶対にしないようにしないと。文芸部の顧問の授業だし・・・それに万葉集は、よさげな感じだし・・・

私は空で、今日の課題の歌を詠んだ。

『我が背子に 我が恋ふらくは 夏草の刈りくれども 生ひ及くご

とし』

ボーッとした授業でも、今日の宿題だけは覚えていることを伝えたかっただけ。

先生は驚いて、

「へー、高山さんはその歌知っていたの？」

「いえ、知りませんでした。授業で初めてです」

「宿題は来週までだけど、もう暗記してしまったの？」

「なんとなく頭に入ってしまった」

「そう・・・ボーッとしていた人が直ぐに覚えたなんて・・・感激だわ」

「すみません、ボーッとしていて」

「いいのよ高山さん、咎めているのではなくてよ。うちの学校の国語と読書の授業は受験用というより人間の感性を磨いて豊かな深い思考力を付けることを目的としているの。だからいいのよ、気にしないで。人間の感情なんて他人に強制されて、それに勉強したってそんなに磨かれるものでもないわ。その人が天性持ったハートというか・・・ちょっと表現は難しいけど、人を好きになる気持ちに似ていると思うけど自然なものね。そしてその自然なものが大切なもの。これから分かると思うけど、私の授業は週に一回万葉集の授業をするの。本当はね、恋愛小説でもみんなで読みたいのだけれど、ちょっと学校ではね・・・それに恋愛ものは一人のほうがいい人もいる

だろうし・・・それで万葉集なの。要はハートの話。恋のアドバイスをしたいの。授業でこんなことを考えている教師って失格かしら。でも大切なことだと私は思っているの。心と感性には、恋の話が私は最高にいい素材だと思っているからよ。恋をしないと美しくもならないわね。だから・・・強制されないのに、すんなり貴方の心にその歌が入ったのがとてもうれしいの。おそらく意味もよく分かっていると思うけど、あなたにはもうそんな要素が備わっているのね。だからきつと、すんなり覚えられたのね」

そうやって先生は微笑んだが、部員のみんなはポカンとしている。みんな・・・女嫌い？・・・そんな訳ないわね・・・木野先生のこ
と好きなんですよ・・・

それから、木野葉杜先生はこんなことをその場で言った。

「たくさん人を好きになって、たくさん素敵な恋愛をしてください
ね」

何を言いたいのか、なんとなく理解できるような、できないような
・

んー、こんな話をする中学の先生も少ないであろう。

それもこんなキュートで美人の、独身の若い先生に・・・この学園
に来てやっぱ、正解・・・

「桜木君、後は君がお願いね。来週でもいいから、年間の活動計画
を私に提出してちょうだい。それと・・・高山さんが入部したの、
私とても嬉しいわ・・・」

先生はそう言うと部員を残してガンバッテと言って準備室を後にし

た。

ジャケットは七分袖。パンツはスッキリスリムで丈は短めのブラツクのスーツを着た先生を見ると、学校で会わなければ絶対に中学校の教諭などには見えないだろう。ナイロール・タイプのメガネも知的に見せている。でも、メガネは伊達かも知れない。したがって・・・絶対コンタクトのほうが美人に見えるし、プライベートではきっとコンタクト・・・確信。

それに学校だから、ムリしてメガネにしているのかも知らない。

一見メガネをすると、大きな会社の最上階にある、役員室にいる秘書のイメージ。

メガネを取ったら、安物のニットチュニックスを着ていてもモデルにも見えてしまうくらいスタイルもバツグン。女性としてはやっぱり・・・懂れね。

「ということで・・・」

部長が何か言おうとしたが、私はここで確かめなくてはいけない。

「あのー部長、私の入部は？」

「あれ、音琶いいんだよな」

「はい、入部決定です」

「高山そういうことだから、これからよろしく。詳しくは西沢に聞いてな」

「あのー、入部テストの課題は？」

「あー、あれな。それは担当音琶だな、音琶」

「はい部長。後で部長にも回します」

「おう、分かった。それと高山、文芸部は生徒会も兼ねるので、そのへんもよろしくたのむな。お前には一番大変な金の管理をしてもらう。こいつらだと無駄使いするから、お前に任せることにした」

「えー、……お金の管理？　ですか……私なんか、ムリです……」

「これは決まりだから、拒否はできない。会計は一年の二人でやってもらう。一番大変な仕事と、会計は一年の仕事だからな。ただ、一年間だけだ。俺も一年のときに音琶とやったし、去年は荒木と星野もやった。去年は失敗だったがな、使い過ぎで」

「すみません部長。運動部の備品が耐用年数を越えていたものが多くて、使い過ぎました」

「ま、仕方ないさ。今年はうまくやってくれよ、高山」

「……リジン……いえ西沢君をサポートしてガンバります」

「いや、高山お前がメインで処理をするんだ。西沢は監査だからお前と相談はしない」

「西沢いいな」

「はい、部長」

「高山心配ない。荒木と星野ががちり引き継ぎするから。それに文芸部員であり、生徒会の大蔵省であるお前に逆らうやつなんていないから心配するな。お願いされるだけだ。生徒会の予算なんてそんなに多くないし、俺たちもサポートするから大丈夫。・・・メインの仕事は、・・・おそらく各部からの予算折衝とお願いだな、きつと」

そう言うとお上級生は笑っている。笑う程・・・大変なの？

「くれぐれもワイロは受け取るな」

うわっ、初めて星野先輩の声を聞いた。

「心配ない。お前と違う」

二年の荒木さんが突っ込みをいれる。

なんか、去年・・・あったのだろうか・・・でもリジンが監査だから・・・大丈夫かな？

家庭の財布は、主婦が握ったほうがいいみたいだし・・・家庭じや・・・ないか。

それにまだ、リジンの奥さんでもないし・・・奥さんになったら・・・

（そうだ、『おはよう奥さま』読んで、勉強しよ・・・）

メインは折衝とお願い・・・大変そうだけど・・・仕方ないのかも。

13. 三年の文芸部

文芸部部长 サクラギシュート 桜木秋杜

白樺学園中等部三年、文芸部の部長であるので生徒会長も兼ねる。名前でお気づきであろうか、得意スポーツはサッカーだ。小学生の頃から、J下部組織のクラブチームに所属し全日本への参加経験もある。現在生徒会長でもあり学校行事もあるが、最優先でクラブの練習には参加している。クラブチームでも将来を期待されているエリートだ。

クラブチームに参加しているのは高いレベルの練習と、なによりクラブチームでなければ全日本の大会には出場できないからだ。将来はJリーガーだ。

文芸部では歴史小説専門に執筆している。

成績優秀、サッカーの練習もして何時執筆しているのか不思議だが、去年も一年の時も長編の歴史小説を完成させ、ある文学賞で入選している。

その作品は中学生とは思えないレベルとの評価がされている。おそらく睡眠時間はナポレオンとそんなに変わらないであろう。

ここでちょっと触れておこう。歴史小説と時代小説の違いを・・・

徳川家康は歴史小説、銭形平次は時代小説。なんとなくわかるであろうか。

登場人物が歴史上実在した人物で、主要な部分がほぼ史実通りにかかれているのが歴史小説。勿論、登場人物の行動、言動に筆者の思い入れが込められている。

時代小説は、銭形平次のように架空の人物を登場させるか、水戸黄門のように実在ではあるが荒唐無稽の史実とは違う、所謂エンターテインメントを求めたものを指している。鬼兵犯科帳などもその部類だ。

かつて、テレビドラマの「チャンバラ」のことを時代劇と言っていたのを考えてもらいたい。なんとなく理解出来ないではなからうか？ そんな感じだ。

アキノモリ・秋杜でシュートと読ませるのも、文芸部の部長という感じでないかな。

ま、文芸部は全員そのへん拘った名前が多いのだが・・・

同副部長

オトワミュージ
音琶美友児

同じく三年の文芸部副部長。名前は・・・おわかりだね、専門は音楽。サクラギ部長が運動部を統括しているので、文化系はこの音琶先輩が仕切っている。ピアノはプロ級でCDも発売されている。もちろんクラシックで、好みはバロックだ。

通奏低音の使用と、感情に則した劇的表現が好みだ。オペラ劇場も多く作られ、この時代に確率されたオペラだが、バロック音楽の代表的な作曲家バッハがオペラを全く作曲しなかったことはあまり知られてはいないだろう。

茶道、華道も師範の資格を持ち、華道については現在日本芸術協会に登録されている392流派の中の代表的流派、音琶流の次期家元継承者でもある。

日本画の表現方法にも通じる三次元空間を二次元で最大限に表現す

る音琶流は、鑑賞する芸術の一般的生け花の世界を脱し、生けられた花だけではなく枝振りや木の幹、苔や葉、自然環境にまで求道的精神を求めアニミズムを蘇らしたことは常緑樹信仰にも通じ、人間の手の力の及ばない神秘の力を花器の上で表現した。

華道は生けた花を愛でる歴史であり、古くは枕の草子まで遡る。

それ故に、音琶先輩は恋愛小説を執筆するのだ。

そんな音琶先輩の醸し出す世界に、女子生徒は憧れを抱く。

14. 二年文芸部

二年文芸部 ケンシ 荒木剣士

円月殺法という邪険で容赦なく人を斬った孤独な剣士、眠狂四郎に憧れる伊賀服部郷荒木村出身の荒木又左衛門の末裔だ。名前でお判りだと思うが剣道ジュニアでは無敵で、既に全日本ジュニアを制している。

芸術にも造詣深く、油絵に関しては誰もがその実力を認めている。

彼が執筆を得意としているホラー小説は、人間の奥深い心理を追求するサイコホラーで、彼の作品に登場すれば私さえも狂気人間にさせられ、人間不信に陥ることは間違いない。

その狂気が円月殺法を習得したいと願う彼に乗り移り、彼の剣にも現れるのであろう。彼と試合をした相手は只ならぬ雰囲気にもまれ、負けてしまうのだ。荒木剣士からは剣道をする清々しい剣士の表情は感じられず、一種異様な威圧感さえ感じる。

彼の目を見た女子は彼に惹かれ直ぐに心を奪われてしまうが、眠狂四郎の如く冷たい彼は女子に興味を抱くことは今のところない。

最近、木野先生の万葉集の授業を受けることにより、やっと目覚めそうだ。

同二年文芸部 ホシノドーム 星野童夢

荒木剣士のライバル的存在の童夢。中等部の運動部の花形は、やはり野球部と剣道部だ。部長のサッカー部も目立ってはいるが、スタ

―選手は皆学校外のクラブチームに力を入れ、校内の部活では練習もあまりしない。部に籍はあるが、普段部活で練習しているのは殆どが控え組だ。試合になれば外人部隊の様な彼等が活躍するのだが。中等部の部活も成績第一主義になっている。・・・そのために、究極の外人部隊のような文芸部が存在するのだが。

そんな外人部隊の如くクラブチームだとかスポーツ少年団に参加している運動部の生徒が多い中、校内の部活に全ての力を注いでいるのが荒木と星野のライバルコンビだ。

星野の専門は・・・そうだ、野球だ。生徒会の方針でも決まっているのだが、二年生は校内で活動し、外に出るのは三年からと決められていた。どうしても部活は対外試合で良い成績を挙げたいという学校の方針もあるからだ。二年中心で校内をまとめ、三年は外に出てレベルを上げる。そして肝心の試合の時にはその三年の力に期待する。そうやって白樺学園の運動部は対外試合で良い成績を挙げてきていた。文化部も同じだ。

そしてその究極の外人部隊が文芸部の六人なのだ。彼等は全てのクラブから要請があれば、外人部隊のようにそのクラブの正規部員としてクラブのために働かなくてはならないのだ。たとえ文化部でも、要請があれば出動するのだ。

その為の普段の鍛錬は欠かせない。文芸部に入部すれば、何時どの部活に参加して練習しても良いことになっている。文芸部に入部した時点で全ての部活に入部した状態となっており、如何なる公式の対外試合も参加できる資格を有するのだ。桜はまだこのことは理解していない。

故に、文芸部の六人は全てのスポーツに万能であり、また芸術的素

養も備えていなくてはならない。現在の三年と二年の部員は、各部の要請に応えられるだけの力は持っている。

リジンと桜も不足している力はこれから補わなくてはならないが、桜木が見た目ではその心配はなさそうだ。リジンは入学前に確認して桜木自ら入部させたが、桜についてはリジンから話のあった後にビデオで桜の参加した試合等を確認し、桜の考えるずっと前から勧誘しようとして決めていた。それはリジンの希望でもあった。

こうして文芸部六人が揃いこれから活躍が始まる。

15. 想い恋焦がれて・・・

「二重耳 妹之將結 帶乎尚 三重可結 我身者成」

大伴宿祢家持贈坂上大嬢詞

大伴家持が後の妻となる坂上大嬢に贈った恋の歌なのですが・・・

・・・日々貴方を思い恋焦がれていたなら、貴方の体に一重で巻いていた帯でさえ、私の体には三重にも結べる程私は痩せ細ってしまっ
た・・・

昔は痩せていたのが好まれていたかどうか分からないが、少なくとも私はガリガリは嫌いです。

ミニポツチャリ・トランジスタグラマーが女子には一番カワイイ体型だと思っているのですが・・・

この歌はメタボ解消を報告するような現代女性には嫌われるような歌ですが、奈良時代の女性はメールをどの様に受け取ったのであるうか。やはり自分に会えない切なさで痩せてしまったと思いを馳せたのだと思うと切ない気もする。

また、歌は誰が届けたの・・・
曲水の宴のように、遣水やりみずの流れに羽觴うしやうに乘せられて送られてくるのを、桂けい、十二単等という衣装をまとい、水辺で待っていたのであるうか。

是非そうあって欲しいという気持ちでいっぱいだが、現実にはあり得ないな。

正直どのように届けられたのであろう、空想は広がる。

手渡しなど考えられないし、伝書鳩はロマンチックだけど、奈良時代ではそれも有り得ない。

まして風車の弥七は生まれてもないだろう。

そうすると可能性があるのは、忍びの疾風のお銀姉さんしか、いなか。

16. パースデー

入学して一週間。あわただしく過ぎた先週はいろんなことがあって大変だった。

部活はリジンと同じ文芸部に決まったけど、本格的な活動はまだぜんぜん。

今週から始まるのだろうか。

それに何と言ってもリジンとの許嫁のことは大きな喜びだったけど・・・どうしよう・・・

嬉しくて、誰かに言ってしまうそう・・・もう喉まで出かかっている。

ガツンと新庄姉妹に言ってしまったいが、問題がありそうだし・・・

そういえば、明後日の火曜日はリジンの誕生日だ。毎年お祝いを言っているだけでプレゼントはしていない。今年は許嫁が判明した以上はそんなことはできないし、なにより私がリジンにプレゼントしたい。

プレゼントなんてしたことないから全然分からないけど、考えるだけで楽しくなってしまう。

何がいいんだろう・・・

リジンに聞けないし・・・誰に聞けば？・・・新庄姉妹にも知られたくないし・・・

美優？・・・かなり・・・危険な感じがするし・・・母親だけど・・・でも聞いてみようかな・・・

久しぶりの天気の良い日曜なのに、家でゴロゴロ。何もしないうちにお昼になろうとしている。

美優はブカブカのスエットでリビングのテーブルの上にお菓子をた

くさん並べテレビを見ている。千と千尋に出てくる・・・みたい・・・
・ゲンメツ・・・

母が見る番組は、お笑いか食べ物番組。日曜の一番のお気に入り
はデブヤだ。

いつもお菓子をパクパク食べながら見るのが最高の楽しみと言っ
ている。

それだからデブルよねー。あー、やだやだ、絶対にあーはなりたく
ない。

でも、女の子は母親に似ると言うし・・・でも私は違う・・・はず
テーブルの上は・・・マカロン、きんつば、それにカキピー・・・
甘いもの、辛いもの・・・いったいどっちが好きなのよ・・・結
局口に入ればなんでも良いのかも知れない。

「桜、お昼何食べる」

「お母さん、そんなに食べたらホントに太ってしまおうよ」

「いいの、康太郎は太っていても私のこと愛してくれるから」

「・・・それが年頃の娘の前で言う言葉かな」

「なんで」

「なんでって・・・デリカシーの欠片もないし、そんなこと聞いた
ら絶対嫌われるよ」

「ふーん、桜もそのうちこうなるのよ」

「私は絶対になりません」

他所の家庭でも娘と母親ってこんな話をしているのだろうか・・・絶対にならない・・・ある訳ない。きっと我が家だけだね・・・だいたい、醜くなっていく妻をずっと愛する夫なんて居る訳がない。

「お母さんところで・・・お父さんにプレゼントしたことある」

「え、急に何・・・どうしたの・・・ほれ、まずここに座ってマカロンでもたべて・・・」

母に言われて座ろうとすると、

「あつ、桜コーヒー入れてきて」

「もー・・・」

まったく我が儘な母親だが、今はしかたないかな・・・

コーヒーメーカーに入っているのをカップに入れてレンジでチン。暖め直せばOK。

コーヒーを飲んでいれば太らないと言って、やたらコーヒーを美優は飲んでいる。

いくらコーヒーを飲んでも太るんだから・・・でも、一旦信じたら母は疑わない・・・

そんなカワイイところもあるのだが・・・

「で、誰にプレゼントするの・・・って、リジン以外いないか」

「わかってんなら、聞かないでよ」

「んー、・・・やっぱナッツクリームがいいな、これ桜にあげる」

そう言って美優は食べかけのチョコのマカロンを私にくれる。テールの上には8個しかないということは・・・1箱14個だから・・・何個食べたの・・・考えたくない。

「お母さんね、若い頃からこれ大好きなの。だからいつも康太郎がなんかあると買ってきてくれたわ。プレゼント、マカロンが、いいんじゃない」

私に食べかけをよこして、自分はナッツクリームの封を切った。コーヒーがブラックだから食べられるのだろうけど、そうでなければ胸焼けして絶対に私にはムリ・・・でも美優は・・・そう、ではないか・・・

に、したって、マカロンがプレゼント？・・・完全にオチヨクツテいるな。

「あのねー、まじめにきいてよ。ホント怒るよ」

「はいはい。で、なんのプレゼント」

「誕生日」

「ふーん・・・プリンアラモードは・・・」

「しつこい。あんまりしつこいと、本当に嫌われるよ」

ちよっと・・・言い過ぎたかも・・・日曜のお昼だもんね、冗談飛

ばしてもいいのに・・・私のほうがなんかアセッテ・・・心に余裕ないみたい・・・少し、反省・・・

「・・・そうよ、やっとわかった。そんなに気張ってもダメなの」

「えっ」

美優は私のアセッタ気持ちを楽にさせようとしているのだった。

「なんでもいいんでない。桜の気持ちはきっと伝わるよ。プレゼントの品でなくて、桜がプレゼントをする行為自体にリジン君は喜びを感じるのではないかな。彼のために考えて行動すること自体に・・・だからホントになんでもいいと思うよ。桜が考えたんなら。だから私に聞かないの」

へー・・・美優もたまにはマトモな事も言うんだ・・・食べてテレビを見ているだけと思っていたけど・・・でも最後のほう、目がマジだった・・・なんで・・・

それから私は美優の隣に座って、マカロンを食べながら一緒にテレビを見だした・・・

マカロン・・・残りは・・・絶対、私までデブル・・・

「ねー、一番簡単に作れるお菓子って、なに」

「あら、桜も女の子したいわけ」

「いいから、おしえて」

「・・・んー、マカロン食べたし・・・次ぎ何にしようかなー・・・

桜、みそラーメンかカレーうどん、食べたい」

「何言ってるの、今まで食べてて」

「マカロンはおやつ、お昼は別なの」

テレビで麺類の特集をやっているのを見ておそらく食べたくなつたのだろう・・・美味しそうだ・・・私まで危険にさらされそうだ・・・

「はいはい、わかりました。で、どっち作ればいいのか、どうせインスタントでしょ」

「冷蔵庫にカレーうどんあるはず。それと卵を2個だして」

「はいはい、で、卵も入れればいいの」

「ちがうの、そのままテーブルの上においといて」

美優からの指示で卵2個は割ってドンブリに入れて常温に戻すために放置した。その前に卵2個の重さを計量し、その重さと同量の小麦粉、砂糖、バターを準備するように言われた。

「1個60グラム位だったでしょ。そしたらあとはその倍ね。わかった」

「で、どうすんの」

「ちゃんと小麦粉と砂糖はスケールで計るのよ、いい」

「わかった」

「そしたらボールに砂糖と卵と牛乳を入れて混ぜるの。牛乳も同じ量ね」

「同じ量って」

「砂糖と同じ、だから120くらい。牛乳はだいたいいいわ、それで牛乳と卵と砂糖を混ぜるの。砂糖はシフターを通してね」

「シフター？」

「あっ、わかんないわね。そこにぶら下がっているスケルトンのふるいのこと、ハンドルがついてるやつ」

「最初からそう言えばわかるのに」

「女の子なんだから名前くらい覚えなさいね。で、砂糖が混ざったらその後に小麦粉。わかった、砂糖、小麦粉、牛乳、卵、全部同じ量ね、覚えやすいでしょ。そして最後にバターも同じ量ね、その銀紙の一目盛りが20よ」

全ての材料が全部同量、バターは最後に溶かして混ぜる。湯煎なんて面倒にことをしなくていい。レンジでチンでOK。時間は溶ける様子を確認しながら自分で確認しながら・・・

「全部混ざった？」

「混ざったけど・・・」

「簡単でしょ、全部同じ量で。それが基本ね、あとはそれにいろいろ混ぜてアレンジするの。じゃ、その耐熱容器に入れて焼いてみようか。あんまりたくさん入れないで、2センチ位かな、オーブンは180度で20分で焼いてみようか」

「で、何ができるの」

「えっ、まだわからないの。マドレーヌよ。これにチョコとかジャムとかを加えてアレンジするの。バリエーションが広がるの。バターを溶かす時に焦がしバターにすると、香りが変わって私は好きね。あなたも好きだわよね」

「えっ、いつも作っていたの」

「買ったと思ってた？・・・ちゃんと型に入れて作っていたからね、買ったと思っていたんでしょ。あの型は100円ショップよ、桜もこれから楽しんで作ったらいいわ。今日は大きなケーキの型で焼くけど、一回焼いて見るとその次ぎの材料の分量に参考になっていいわよ。焼いてみないと分からないからね。で、次ぎからは自分の感覚できめるの」

20分で完璧に焼けた。でも粗熱が取れると少し堅く感じた。私の感覚では砂糖が多い様な感じた。堅くなっているのは砂糖の所為だと思う。次回は少し少なく・・・

焼き上がりの表面がいつものマドレーヌの色ではないので、230度で3分追加し焦げ茶にした。試食・・・やっぱ砂糖少し減らしてもいいかも。

リジンのプレゼントはこれで決定にしよう。

ネームなんか入れて焼いちゃう・・・それとも、Loveとか・・・
キャー・・・恥ずかし・・・

私からリジンへの初めてのプレゼント・・・それも手作りの・・・
絶対に・・・Loveで決まり。キャー！

17. 今夜もまた・・・

「桜、早くしないと、遅れるわよー」

「はい」

天気はくもり。

でも、私のハートは快晴。

時間は午前7時40分。

やば、遅れちゃう。

急いで朝食にキッチンに行くと・・・

「おはよう」

爽やかな声と笑顔。一瞬のアイコンタクト、許嫁のリジンが今日も迎えに来てくれている。

まだ中学1年なのに、こんな素敵な許嫁がいて毎日迎えに来てもらって・・・私ってなんて幸せなのかしら・・・

えっ、嘘・・・昨日最初に作った試作のマドレーヌをリジンが食べている。

また美優がよけいなことしている。

明日渡すのに今日食べたら・・・喜びが少なくなるでしょ・・・それより失敗作なのに・・・

ひどい・・・美優。

二度目の作品はなんとか良いと思うけど・・・でも、結局メッセー
ジは入れなかった。

入れなかったと言うより、だいたい焼いたら全部焦げ茶色で全く読
めないのを忘れていた。・・・で諦めた。

ケーキじゃないからクリームで書く訳にもいかないので、仕方ない
からラッピングの時に包装紙に書きゃった。それにリジンに渡す
のはハート型のマドレーヌシエルを使ったので、メッセージは不要。
私の気持ちは伝わるはず。バレンタインのチョコも今まで意識して
渡したこと無かったのに、私にしてはかなりの進歩だと思う。・・・
一応、恋する乙女だし・・・
だから・・・

「桜、もっと早く起きなさい。そんな事じゃ主婦なんてできないわ
よ」

「お母さん、リジンがいるのに何言うの。それに昨夜はちよつと遅
かったから。明日からは早く起きるからだいじょうぶ」

「はいはい、精々早起きして。リジン君と一緒にになったら愛妻弁当
作るのよ」

「何言っているの、毎朝ホントに・・・それに自分なんか愛妻弁当
お父さんに作ってないじゃん」

「あっ、知らなかったの。康太郎は私の愛妻弁当を持って行ってる
わよ。フレックスタイムなので出勤時間が今は少し遅いの。だから
桜が登校してからゆっくり作っているの。1週間に1度だけだね」

「1度？」

「そうよ、1週間で1度月曜だけね。私の仕事が休みの時だけ。あ

とは康太朗と私の会社が近いので、いつも二人で外食をしているの。二人でいろんなお店に行って楽しいわよ。夜は結構忙しいから、お昼はいつも二人で楽しんでいるの、いいでしょう」

「へー、知らなかった」

「康太朗がお昼も私に会えないと寂しいと言うの」

「はいはい、どうぞご自由にしてください」

全く朝から付き合っていていられない。絶対に親子の会話でないね。まるで友達の会話だ。それにリジンもいるのに・・・

「あつ、桜、今夜ちよつと桜に話があるの。それに明日リジン君の誕生日だったわよね。リジン君も夕飯一緒にどうかしら。誕生日のお祝いも兼ねて」

「いいけど・・・でも、最近多いね、話・・・」

「いいの、大人にはいろいろ事情があるの。リジン君も都合付けてくれると、いいんだけど・・・お母さんにはまた私から連絡しておくから」

「はい、わかりました」

「だいじょうぶよ、悪い話でないから」

悪い話ではないと言っても、先週も驚かされているので心配だ・・・

「どんな話なの」

「桜、時間ないわよ、早く学校に行きなさい。じゃ、夜ね」

「・・・わかった。・・・リジン、行こう」

18. レシピ

「ただいまー」

早っ。

「今日は随分早いわね、ホントに学校に行っていたの・・・リジン君と二人でどっかでさぼって、いいことしてなかった・・・」

自分の子供を信じていないの・・・だいたい、今日早く帰っておいでと言ったのは、美優でしょ・・・

私だって・・・そうやって、リジンと学校さぼって遊んでみたいけど・・・

なんて気持ちには、全くなりません・・・リジンが傍にいれば・・・リジンの姿が見えれば・・・私はそれで満足なの。

勿論、リジンに誘われたら何処へでも付いて行くわ・・・許嫁ですから、困ることも障害も私には全くありませんし・・・

あるとすれば、私の気持ちと世間の視線のギャップ・・・温度差・・・ぐらい、かな・・・

世間の視線と言うより、白樺学園の生徒の目かな。

もう既にかなりの噂となって・・・私はリジンファンの女子から冷たい視線を浴びている・・・

カッコイイ男子を彼氏・・・いいえ、許嫁に持つと、苦勞するわ・・・何時になったら許嫁の事実を公表して平穩になれるのかしら。そうね、公表などしたら今よりもっと大変な事になるわね。

「なんか良い匂い」

「リジン君誕生日だからケーキ焼いたの、インスタントだけどね。でも食べたら同じよ」

「インスタントでケーキ」

「そ、簡単よ。桜にもすぐにできるわよ。レシピはこのノートに書いてあるから」

「書いてあるって・・・直接教えてくれればいいのに」

「それが出来ないから書いてあるの」

「出来ない・・・」

「そうよ、これからは桜が作ってリジン君に食べさせてあげるのよ」

「なんか、嫌な言い方」

「そうね、大人の事情でね」

そう言って美優は私にノートを差し出した。

19. シャンメリー

全員集合、なんか最近このパターンが多いような気がする。
私の気の所為ではなく、確実に多い。

「美優、今夜もドンペリはあるのか？」

「あるわよ」

「ホントかよ、俺は美人で、できた嫁さん持って幸せだよ」

「ハイ、ドンペリ。今夜は贅沢して、ゴールドとピンクね」

「えっっ・・・」

みんなの目がテンになる。これって、もしかしくても・・・

「シャンメリー・・・」

「世間では、そうとも言うわね」

テーブルの上に出されたシャンメリー、確かにゴールドとピンクだ。カレーシャンメリーと、いちごミルク味シャンメリーも。

「美優、マジ？」

「いいの、主役は子供達なんだし、それにドンペリはたまーに飲むから贅沢した気分になれるの」

そう言って美優は大量のシャンメリーを出してきた。カレーにいちごミルク味、それにホワイトとロゼ・・・こんなに種類があったんだ・・・。康太朗は一本飲んだが、さすがに二本目には手を出さなかった。私とリジンは・・・勿論、四種類全て味見をした。

「美優、それで今夜の話は・・・」

「桜、母親を美優と呼ぶのは・・・ま、いいか」

美優はそう言いながら笑っている。

「じゃ、リジン君の誕生日をお祝いして、乾杯しようか」

私とリジンはカレーシャンメリーをコップに注ぎ足した。美優はさっきからワインを自分だけ飲んでいるし、康太朗は・・・ウーロ

ン茶だった。

「それでは、リジン君の誕生日と、みんなの未来を祝して・・・カ
ンパーイッ！」

全員で唱和。

「カンパーイ！」

「リジン君、桜をヨロシクね」

「はい」

美優が珍しくマジメにリジンに頭を下げた。もう、酔っているの
かな・・・

「桜もこれから、ガンバルのよ」

「何よ急に。私はいつもガンバッテいますよーだ」

暖かい、ホノボノして、これが家族団欒というものなのだろうか。
・・・

でも、やっぱり最近このパターン多い。どうして？ リジン・・・
そうだ、リジンの両親も呼べばいいのだ。・・・でも、入学式のこ
と考えると・・・チョットやばいかな・・・

今夜のメインは、リジンの大好きなカラアゲだった。

ちなみに、北海道では鳥のカラアゲを「ザンギ」と言う。発祥の
地は釧路と言われている。北海道で有名な「豚丼」もそういえば釧
路だった様な気がする。ザンギは、中国語で鳥の唐揚げのことを、
「ザーギー」と言うが、その言葉の間に「運」がつくように「ウン」
を入れたことが命名の由来らしい。ウソのような、ホントの話。

「で、美優お母様、今夜の重要なお話はなんですか」

20. 美優と康太朗

「実はね桜、私と康太朗は仕事の関係で、暫くこの家からいなくなるの」

ちよっと、ビックリ。美優はワインをゆっくり飲みながら話した。

「私の会社で札幌に支店を出すことになって、そっちに暫く行くことにしたの。最初は行かないつもりだったけど康太朗が札幌に転勤になるので、それで私も一緒に行くことにしたの。康太朗と離れたくないから。」

父の転勤に合わせて、自分も転勤を受けたとのことだった。

「だったら、私も行くわよ」

「それでね、最初は桜も一緒にと考えたのだけど、学校に入学したばかりだし、それにせっかく白樺学園に入学したから桜をひとりここにおいて行くことにしたの」

「ずるいよ、そんなの・・・」

「リジン君と離れても、いいの」

「それは・・・」

「桜も中学生だし、それに札幌だったら飛行機ですぐだから、いいよね」

どうしよう・・・かなり迷うけど、リジンとも離れたくないし、それに札幌だったらそんなに遠くないし。でも、ひとりで生活できるのだろうか・・・

「それでね、ここからが大事な話なのだけど。それで、桜ひとりでここにおいておくのは心配なので、リジン君にここで一緒に住んでもらうことにしたの」

「えっ、」

なに、言っているの。リジンと二人でここで・・・生活？ そんなこと、出来るわけじゃない・・・

「いったい、我家の両親は何を考えているの。それに、リジンの両親も同意する訳ないじゃない・・・」

「リジン君の両親も、そしてリジン君も同意しているのよ。ね、リジン君」

「はい」

「うっそー、マジ。・・・いったい、どうなって、いるの・・・」

「かわいい娘が心配でないの・・・」

「許嫁のリジン君が一緒だから、心配はしていないわ」

「そうじゃ、なくて・・・」

「桜の言いたいことは分かるわ。でも、そこは二人で解決してね」

「許嫁とは言ってもまだ中学生だし、お互いに一緒に生活して、将来を考えるのもいいかも知れないわね」

信じられない、常識では考えられない。でも、本当にそんなことして、いいのだろうか・・・結構、いろんな問題があると思うけど。

「リジンの家に、下宿してもらうことはできないの？」

「それも考えたけど、そうしたらこの家に誰もいなくなって家も心配だし、リジンのお母さんも氣を使うだろうから・・・それになにより桜のことを考えたら、これが一番いい方法だと思ったの」

私はいいけど、リジンはどんな気持ちなのだろうか・・・

「・・・・・・・・」

「二人でガンバツテ、生活してみたら・・・」

ホントニ？・・・

「桜が即答しない訳はなに？」

分かっているくせに・・・美優のイジワル・・・

「・・・・・・・・」

突然そんなこと言われても、驚かないほうがどうかしている。
私の迷いは、なんなの・・・リジンと一緒にいるのは嬉しいはずな

のに・・・

「あんまり嬉しくて、言葉がでないの？」

「お母さん・・・」

「あら珍しい、いつもは名前で呼ぶのに、そんなに嬉しいの」

「イジワル・・・」

自分の中では嬉しいけど、ちょっと複雑な気持ち。自分のことより、回りのことを考えてしまう。
一緒に暮らしていることが近所、同級生に知られたら・・・どうなるの・・・

「近所とか学校にはどうするの？」

「そんなこと心配しているの。違うでしょ、ホントは・・・やめとくわね、この先は」

康太郎も話しだした。

「桜、これは一応決めたことだけど、どうしても桜が否だと言うのなら、考えなくてはならないな。私と美優が移動するのはまだ先のことだから、暫く考えてどうしてもだめだったら言いなさい。その時また考えよう」

「わかった」

否と言う訳ではないけど、直ぐに喜ぶこともなんとなくできない・・・

・どうしてなのか自分でもよく理解できないが、それが普通なのではないだろうか・・・

リジンはあまり発言しなかったけど、その夜のリジンの誕生会はその後楽しく遅くまで続いた。この話は私が少し考えるということ、その後は話題にできなかった。その後はみんないつものように振る舞い、リジンも話はしなかったが、笑っていた。

私はもうその時、気持ちの中ではリジンと二人でここで生活するところが決心できていたが、その場で話はしなかった。

21. 気掛かり

今日もまた一緒。いつものようにリジンが我家に迎えに来てくれて、一日が始まる。

「おはようリジン。もう来ていたの、早いね」

美優が食事の準備をしている。父康太朗はいつも早く出社するのだが、転勤が決まってからは一般家庭のように私の登校時間と同じくらいの時間だ。

今朝も珈琲を飲みながら新聞を読んでいる。

「朝パパがいる生活なんて、普通の家庭みたいでいいね」

「あら桜、うちは普通の家庭よ」

とてもそんな感じには思えない。中学生同士の許嫁に、一緒に生活しなさいと言う家庭が一般の普通な家庭とはとても考えられない。ちょっと変わっていると思う。別にそれが嫌な訳ではないけれど、いつも少し驚かされる。

リジンの家も我家同じような感じなのだろうか・・・すごく興味が湧く。リジンと結婚したら私の親にもなる訳だし、余計にそう思う。リジンの両親と話をしたこともない・・・そう言えば許嫁なのに、まともに紹介してもらっていなかった。私が挨拶に行くべきだとは思うけど、美優も康太朗も何も言わなかった。

リジンのお父さんは美優の昔の恋人で、お母さんは康太朗の元婚約者。すごく興味がある。本当に今の関係は、問題ないのだろうか。

早く会って話をしてみたい・・・どんな両親なのだろう・・・

「桜、早く食べなさい」

今朝の美優の格好は、なに？・・・

今朝だけではなく入学式でまともな姿を見た以外、最近はいつもこんな感じだけど。

気にしないようにしよう・・・いつものこと。

「桜、今日も仲良くお手々繋いで学校に行くのよ」

「はいはい、言われなくても今はいつもそうですよ」

「へー、桜も言うようになったわね」

「行ってきます」

今日もまた一日が始まる。入学式から連日驚きの毎日だ。今日も何かあるのだろうか・・・学校でリジンとの噂も広まり、当分は人の目も気になるが、そのうちに静かになるであろう・・・そう願いたい。

「リジン、ちょっと聞きたいんだけど・・・」

私は胸の中で何か引っかかっている気持ちをリジンに向けた。

「私の両親とリジンの両親は知り合いで・・・それもちょっと訳有りの知り合いで、みんな私達を許嫁にするくらい仲が良くて・・・それで・・・」

「桜、何が言いたいんだ」

「リジンは私の両親とも仲が良くて・・・」

「はつきり言えよ、桜」

「私リジンの許嫁なのに、リジンの両親と話したこともないし良く知らない。みんなはなんか、話しが通じているみたいだけど、私だけ仲間はずれみたい」

「そう言われれば、桜は俺の両親と話をしていないな」

「そうでしょ。話しもしないで許嫁にしても、いいわけ」

「そう言われれば、そうだな」

「それに両親同士の昔の話も気になるし、この前の話でもまだ何かあるような話だったし・・・なんかあるの・・・」

「俺はもう何も桜に隠してない。知っていることは全部桜も知っていることだし」

「なんか、変なんだよね。私がリジンの両親に会っていないのも。普通許嫁のことを打ち明けるのだったら、その前にリジンの両親に会っていても、いいんじゃない。会っているのが普通でしょ」

「そう言われれば、そうだな・・・」

自分でリジンに話しをしていて気がついた。こんな話をする予定ではなかったけど、話をしているうちに不思議に思えてきた。・・・息子の許嫁と話もせずに・・・昔から知っているとは言っても子供

の頃の話で・・・成長して判断ができるようになってからは話をしている。それとも、生まれる前から決められていたので会う必要がないのだろうか・・・

それに私には気になっていることが、まだある・・・

22. リジンと私

今、私の胸の中に誰にも言えないことがある。勿論、両親にもリジンにも言えない。

美優から両親の昔の話を聞くまではどうでも良いことだった。でも・・・両親同士が昔恋人で結婚をきめていたこと。そして、私とリジンが許嫁として生まれる前から決まっていたと聞いた時から、その気持ちは・・・確かめたい気持ちは強くなった。どうでもいいこと、なのだろうけど・・・

でも、この事はまだ誰にも言えない。リジンの両親に言えば、少しは気持ちが変わるのだろうか。それとも、余計に強くなるのだろうか・・・つまり、ちょっとした私の気掛かりだけど・・・

それは、リジンが私の飲みかけのコーラを飲んだとき気がついた。ビックリして正面からリジンの顔を見た時だった。リジンの額の中央と左目の下のホクロ。スッキリした綺麗な白い肌。そんな顔に目立つ二つのホクロ。どこかで見た・・・顔のホクロなんて誰にでもあるけど、同じ場所に二カ所あるのは珍しく思えた。自分の知っている人間、それも身近な人の中に同じ場所にホクロのある人間がいるのだ。面白い偶然だと思っていた。美優の昔話を聞くまでは・・・私にも顔の目立つ所にホクロがある。小さい頃から気にしていたが、場所も数も違った。でも、私にもホクロがある。・・・これは・・・あり得ないことだけど、もしかすると・・・こんなこと、考えてはいけないことだ。

でもあれ以来、リジンと父康太郎の同じ二カ所のホクロの一致が気になってしかたがない。私も父と同じ場所にあれば嬉しかったのだけど。今となっては、気掛かりでしかない・・・

私のホクロは唇の左上に三つ並んである。三つも同じ場所にあるのは珍しいと思っている。美優にも康太郎にも、勿論リジンにも同じ場所にそんなホクロはない。でももし、これと同じホクロがリジンの身近な人にあったら・・・ホクロなんて遺伝しないことは知っているが。でも、リジンのホクロを見ると本当に気になる。馬鹿みたいことだけど、なんとなく落ち着かない。同じ場所に同じようにホクロがあったって、どうってことないのかも知れないが。

美優の話を聞いてから、そんなことが気に掛かっている。

私はリジンの両親を良く知らない。顔だって近くで見たこともない。・・・ホクロはあるのだろうか・・・

入学式の時に美優と一緒にいたリジンのお父さんを見たとき、リジンと似ていると思ったけど、でも本当にそうだったのだろうか・・・リジンもお父さんも背が高かったので、単純にそう思ったただけだったのかも知れない。

私も女子にしては背が高いけど・・・

康太郎も背は高い、だけど、ホクロはない・・・

何、馬鹿にこと考えているのだろうか・・・

この気持ち、抑えなくては・・・いけないのだろうか・・・

23. クラブ対抗駅伝大会

学校生活は相変わらず多忙な毎日だ。

入学して約3週間、もうすぐGWの5連休だ。学校生活も少しずつ慣れてきたが、新しい友達はまだいない。いつも変わらず私の周りには双子の新庄姉妹とリジン。それと文芸部の四人の先輩達だけで、新しい出会いはない。

リジンがいるので新しい出会いなど必要ないけど、新しい女子の友達は欲しいと思っている。

文芸部の活動も、毎日部室に集まってコーヒーを飲みながらのいつもの顔合わせ。出席は自由なのだがどこにも行くところがないので、取りあえず毎日図書準備室に行っている。変化があったとすれば、コーヒーを入れる役割が自然と私になったことと、全校集会で正式に生徒会の会計に任命されたことだった。会計は毎年1年が担当しているので2、3年からは驚きの声もなかったが、何も知らない1年からは私がどうして生徒会の会計になったのか不思議がる声もあった。クラスでの選抜でもなく、いきなり生徒会の推薦で決めたのでこの学校のしくみを知らない1年は驚いたのかも知れない。

文芸部全員が生徒会の役員を兼ねているので、文芸部の部室が生徒会室でも良いのではと私は思ったが、執行部の会議室は別にあった。おそらく、ゆっくりコーヒーを飲む場所で生徒会の仕事などしたくなかったのだろう。ここは本当に落ち着ける部室だ。

生徒会長の桜木部長は文芸部より生徒会の会議に出席していることが多かった。文芸部の部員も役員だったが、生徒会の会議に行くことは少なかった。少ないと言うより、最初の顔合わせだけでそれ以後出席することはなかった。

今日は珍しく文芸部員全員が揃っている。

コーヒーの香りがする部屋の中で、部長が座りながら話した。

「みんな聞いてくれ。GWが終わったら最初の行事の各クラブ対抗駅伝大会があるのは知っていると思うが、今年は文芸部でも参加する。各部が予算の上乗せを目指してガンバッテいるので、文芸部も今年初めて参加してみようと思う」

「部長、文芸部は6名しかいないので高山を入れての参加ですか？」

2年野球の得意な星野が部長に聞いてくる。

校内の部活に力を入れている同じく2年荒木も星野と同じ質問をしたかった様子だ。普段、校内のクラブで実力は見せているが、文芸部の存在を今一度校内に認めさせたいと二人は考えているようだ。

「そうだ、問題ないだろ。別に男女混成チームはだめと決めていないからな。高山にはガンバッテもらうぞ。それとあと一名は木野先生が走る。それで七名だ」

「先生も走るのですか」

星野が少し暗い顔をした。顧問だと絶対に勝てないとも言いたそうな表情をしている。

「参加しろと言ったのは先生だからな。毎年全クラブが参加するのに、どうして文芸部は参加しないのかと言われて部員が足りないと言ったら先生が走ると言ったのでそういうことになった」

「先生、大丈夫、なんですか」

「わからん。ただ、先生が走ると言っても、ある程度成績を残さないと各部に示しがつかないので頑張ってくれ。女子二人のタイムが

ポイントになると思うけど、できれば優勝、だめでも三位まで入賞したいと思っているからな」

部長はそうは言うけど、女子二名の入った混成チームでの優勝は厳しいと思う。陸上部、そして男子の運動部に適う訳がない。部長は結構厳しいことを平気で言う。星野も荒木もそう思っていた。今回は初めて文芸部が参加するので、参加する事に意義がある・・・なんてことにはならない。今後の文芸部の活動、校内での位置づけのためにも2年の二人はどうしても優勝したいと考えている。

「ということで、駅伝大会の監督と作戦は星野にたのむ。よろしくな」

マグカップを机の上に置いて部長は立ち上がった。部室を出て行く雰囲気だ。

「はい、わかりました」

「じゃ、たのんだぞ。俺はこれから生徒会の会議があるので、あとは音琶よろしく。それから高山、入部試験の小説の続きを書いておくように。追試だ」

「えっ、追試ですか・・・」

「続きが読みたいから追試、暇な時でいいから書けよ」

「はー?・・・」

部長はそう言って生徒会の会議に行った。本当に文芸部にいるよ、生徒会に行くほうが多い。誰か好きな人でもいるのだろうか・・・

・
そうか、好きな人がいるに違いない。

でも、部長の好きな女子って、どんな人なんだろう・・・
ま、でも私にはリジンがいるから関係ないけど。

でも入部試験の追試、どうしようかな。続きを書くことは書いているけど、今のままではとても他人に読ませられない内容だ。ペンネームとか匿名で書いて私が誰か分からなければいいけど、文芸部ではそれは無理。やはり読まれたくない部分は書き直しが必要だ。

24. 血液型

美優と康太朗の札幌への移動は五月末と決まった。あと1ヶ月もない。引越の準備も少しずつ始まった。

本当にリジンと二人で生活できるのだろうか・・・

札幌へ二人が行ってしまう前に確認したいことがあるが、かなり危険な問題なので聞くことが良いのかどうかも迷っている。そして、誰に聞いたら良いのかも分からない。

ただ、どうしてこんな事を思い着いたのか自分でも不思議だ。仮に自分の考えている事が事実だとしたら絶対に許嫁なんて、まして私とリジンの両親の二組の夫婦が仲良くしている事などあり得ないと思っっている。

しかし自分とリジンは許嫁で、将来の結婚の約束まで出来ている。そしてこれから同居もする。

自分の考えて居ることがもし事実なら、とても普通では考えられない。

だから余計にそう思っても、あり得ない話だとは思えなくなっているのだ。もう常識の通じる話ではなくなっている。

ただ単にホクロから思いついた事だが、今後の展開については自分でもどうなるのか皆目見当も付かない。

でも直ぐにでもリジンの両親に会って、ホクロの事は確かめておきたい。

リジンに両親に挨拶さして欲しいと頼もうと思っている。

私の考えていること。それは二組の夫婦と二人の子供のリジンと私、家族の組み合わせがどこかで違ってはいないかということ。

25. 同棲生活（前書き）

1年振りに再開します。また以前の様に更新できる様に書いていく気持ちでいます。

話は美優と康太朗の北海道転勤から1年が過ぎ、桜の生活も変化しています。

これから二組の夫婦と二人の子供、桜とリジンに変化が発生する予定です。それは、桜が気にしていた自分の両親への疑いから、話は展開する予定です。

25. 同棲生活

美優と康太朗が札幌へ転勤してから1年が過ぎた。

私とリジンは、世間の目を盗みながら同棲生活をしていた。

結局、私が気にしていた二組の夫婦と私とリジンについての疑問は美優に聞けないままとなって現在に至っている。

リジンと一緒に暮らす生活もやっと慣れて、最近では本当の夫婦のような気持ちとなっているのが自分でも理解できる。

しかしまだ中学生の私とリジンは、許嫁と同棲生活を公表する事は出来ないでいた。

両親が札幌に転勤したのもリジン以外、誰も知らない。独り暮らしと知って友達が来るのを恐れたのが一番の理由だ。文芸部の部員以外友達の少ないのも助かっているが、それでも新庄姉妹は最近何か気がついていっている様子で注意が必要だと思っている。

順調なのはリジンとの仲と文芸部の活動ぐらいで、学校から出るとリジンとの同棲生活が知られない様に気を使う。

両親が札幌へ転勤する前からリジンの両親に会いたいと思っているが、未だ実現していない。家では主婦の勤めもしなくてはならず、忙しくて時間が作れないこともある。

しかしそれだけではない。リジンの父には何度かそれでも会ったが、母には会っていなかった。忙しくて会えないというのが理由だが、避けられている様な気持ちも最近は感じている。

会ってみたいという気持ちがあるが、文芸部の活動と、新しい生活で会う時間が作れないのも事実だ。

リジンと生活を始めたのでリジンの両親が家に来る事も考えたが、今のところ訪問もない。こうなると、やはり何かあるのではないかと云う気持ちになるのは、私だけではないと思っている。

26. 進級

「リジン起きて、朝だよ」

「桜もう少し寝かせろよ・・・」

「早くしないと学校に遅れるから」

「いいよ、今日は学校休んで桜と一日ゆっくり・・・」

「早く起きて、ハニートースト焼けているよ・・・」

「今日のアイスはなんだ。ツインベリーチーズがいいな・・・」

「ちゃんと買ってあるわよ・・・」

・・・夢？・・・

現実はあるのに甘まくは無かった。

朝6時の起床でないと、今の生活は全然間に合わない。

でも、そんな生活が楽しい。

私には朝5時起床でも・・・全然楽しいと思う。それは・・・リジンと一緒にだから。

学校は給食だからリジンのお弁当を作ることは必要ないけど、朝シヤンと熱いシャワーは眠気冷ましのために私には必須。リジンが起きてくる前に、それを済ませるのが私の朝の日課だった。二人なのでやはりちよつという気になり、シャワー上がりの姿を見られな

いで準備をするのを私は心がけた。

私とリジンの恋の進展？・・・秘密。中学生ですから、許嫁でも清く正しく生活しています。でも、登校時のお手々繋いでだけは継続中です。

最近では2年になった事もあるけど、私とリジンの仲は全校で知らない生徒がいなくなり、公認の様な状態になっている。

それでも新入生の1年生から、リジンは何度もラブレターを貰っているみたい。

よく文芸部の部室で冷やかされている。

実は私も何度かラブレターを貰っているが、リジンには内緒にしている。

変に揉めたくないから。

文芸部は3年生が卒業して、今の部長は荒木部長。そうすると来年は当然リジンが部長になる。・・・そして私は副部長でリジンをサポート。・・・素晴らしい、夫婦愛？　な、事を考えている私は、浮かれ過ぎ？

桜木部長と音琶副部長が卒業したので、担当のクラブも少し変化した。

桜木部長についてサッカー部の練習に参加していた私は女子だがサッカー部の担当となってしまった。ま、いざとなれば全てリジンが助けてくれる事になっているけど。

音琶部長の担当していた芸術関係も一部私が引き継ぎ、あとは今年の一年生に担当させた。一年生の事については、後で・・・。

リジンは三年生の担当している剣道部と野球部以外の全ての運動ク

ラブを担当し、今年新たに作られたフットサルも私と二人で担当してくれる事になった。

女子のサッカー部がないので、人数的にも直ぐに始められるフットサル部を作ってもらった。フットサルは男女混合も可能なので、その点でも話はうまく進んだ。小学校の私の後輩も勧誘し、私に何人かの部員ができた雰囲気もある。その中から何人か、文芸部のアシスタントとして使える部員を私は育てようと考えていた。

学校生活、生徒会と文芸部については順調に推移している。

ただ、リジンとの同棲生活については、近所の目もあり苦勞している。二人の生活が学校に知られるのも時間の問題とおもわれる。

その時はどうしたら良いのだろうか……

康太郎と美優は札幌だし……リジンの両親が助けしてくれるのかな？……

まだ、リジンの母とは会っていないし……どうすれば良いのか。身近に相談できる大人がいて欲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0653i/>

ひまわりに恋して

2010年10月12日18時02分発行